鍛冶屋とかはじめてみました

あああ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
鍛冶屋とかはじめてみました

【Ｎコード】
Ｎ７５３１Ｔ

【作者名】
あああ

【あらすじ】
気がついたらネットゲームの中にいた俺。
極まっている鍛冶レベル、加工のための必要最小限の魔法レベル、同じく素材集めのための必要最小限の冒険者レベルでどうやって生きていったら良いのやら。
取り敢えず、鍛冶屋はじめてみました。

第一話（前書き）

２０１１年６月１３日
一部用語および感想にてご指摘頂いた表現を修正しました。

２０１１年１１月５日
頂戴したご指摘を参考に、銀の剣について、純銀のものではなく、鋼鉄の剣に銀の装飾を施し、その装飾に効果があるという記載を追加しました。

第一話

３４日目　日本サーバー　【森１４エリア】ユーザーハウス

簡単に自己紹介をしたい。
俺の名前はｔ－ｙａｍａｄａ１２３４という。
統合レベルは６３、いや先ほど６４になった。
ちなみに、鍛冶レベルが５０で、魔法レベルが１０、戦闘レベルが４だ。
分かりやすく言うと、プロの鍛冶師で、アマチュアの魔法使いで、雑魚の戦士だ。
そんな俺だが、現在何をしているのかというと、鍛えた鍛冶の技を用いて受注した依頼の品を製造している。
明後日までに俺が納品しなければならないのは、銀の剣２本、鉄の剣５本、木の矢５０本、鉄の盾５つだ。
普通であればこのような短納期でこれだけの数量を用意することは出来ないのだが、俺には鍛え抜いた鍛冶スキルがある。
サービスで作成する等級を＋１０にしても納期内に全てを準備することが可能だ。

「どもー、ガルダン武器店です。
依頼の品を引き取りに来ましたがいらっしゃいますか？」

工房の入り口から元気の良い声が聞こえてくる。
そういえば、今日が納品日の依頼もあったな。
そんな事を思いつつ、俺は腰を上げた。

「ああ、いるぞ。
今そっちへいくから待っていてくれ」

朝起きたら知らない部屋の中で、外見は自分のプレーヤーキャラクターで、身に覚えのある能力を持っていた。
そう、いわゆるＭＭＯＲＰＧ系鍛冶屋ものである。
経験者に会うことができたら是非とも尋ねたいのだが、俺は元の世界に帰ることが出来るのだろうか。

「じゃあ確認するぞ。銀の剣が２本、鉄の剣が５本、木の矢５０本、鉄の盾が５個だったな」

店先には既に荷車が待機している。
護衛の冒険者三名を連れた武器屋は、俺の納品書と目の前の品を見比べている。

「はい、はい、確かに全部揃っていますね。
まあ、ヤマダさんの事だから、漏れなんてあるわけもないですけどね」

報酬の銀貨が詰まった革袋がカウンターに置かれる。
これだから鍛冶屋は素晴らしい。
厳密に言えば販売店である彼らのほうが多くの利益を得ることができるが、俺は納品先さえ確保すれば安定した生活を送ることが出来る。
今のような地道な仕事を繰り返し、最終的に高額な製品の単価で稼げるようになれば万々歳だ。

「銀の剣の質を是非とも見てやってくれよ。
通常の倍はいい物のはずだぜ」

念を押すだけのことはある。
銀の剣とは言っても、実際には銀の装飾を施した鋼鉄の剣である。
だが、魔属性のものに大きな効果を発揮する銀の装飾があることにより、ただ鋼鉄の剣よりもモンスターに対して大きな効果を発揮することが出来る。
銅より鉄、鉄より鋼鉄、鋼鉄より銀と、基本的にはランクが上がるほどに武器としての能力と価値は増大する。
この世界、ＮＰＣの場合は熟練の鍛冶師の一生に一度の最高傑作で＋３が限界である。
これがプレーヤーキャラクターとなると、鍛冶レベルに応じて＋７だの８だのを片手間に量産することが可能だ。
武器自体のランクによって出来る等級は変わってくるのだが、最低ランクに近い鉄の剣であれば驚異の＋１０にすることも余裕なのだ。
そして、俺のように鍛冶レベルが最高の５０になると、大抵のものは流れ作業で＋１０になるし、気合を入れればどんなものでも＋１０まで上げることが出来る。
まあ、そんな事をするとこの世界で初めて物を売ったときのような騒ぎになってしまうのだが。
そういやあの悪徳商人たち元気かな？
俺の足を切り刻んで奴隷にしようとしてきたので足を切り飛ばして洞窟に放置しておいたが、もう全員死んじゃったかな。

「そりゃあもう、私は親方ほど目利きではありませんが、こいつがいいものであることはよく分かります！
いやー初めてヤマダさんを担当する事になったと聞いた時にはどんな罰なのかと気落ちしましたが、今では貴方が出来る人に見えない事を感謝していますよ！」

多分、悪気はないんだろうな。

護衛の冒険者たちがギョッとした表情を浮べている。
戦闘レベルが2の彼らからすれば、魔法の心得すらある俺を怒らせる事は死を意味する。
とはいえ、そこまで俺は短気ではないんだが。

「あー何度も言っているが言葉には気をつけろ。
気にしていないが、お前さん、褒めるどころか相当に失礼なことを言っているぞ」

苦笑しつつ訂正してやる。
どこの世界にもミスがなぜか許されるという存在がいるものだが、だからと言って誰も訂正しないというのは本人のためにならない。
特に鍛冶屋なんていうのは気難しい連中が揃っている。
俺が何でも笑って許してやったとしても、そのうち誰かに怪我をさせられることになるだろう。

「あー、いや、悪気はなかったんです」

武器屋見習いである彼女は、ぎこちない笑みを浮かべて謝罪の言葉らしいものを言う。

「これも何度も言っているが、謝るときは相手にはっきりわかるように謝れ。
下手な謝罪はしないほうがマシな結果になるぞ」

あまり説教じみたことは言いたくないが、ここは本人のためである。
もちろん時と場合によるが、それでもはっきりとごめんなさいが出来ることは社会人として必要なスキルだ。

「はい、すみませんでした」

今度は明らかな謝罪の言葉を発しつつ、彼女は手早く荷物をまとめていく。

これ以上あれこれと言うつもりはないが、まあ、いいか。

「それじゃあどうも。また発注してくださいね」

決まりきった言葉で別れを告げる。

今の俺の取引先はガルダン武器店しかないので、これでまたのんびりできそうだ。

「ええ、明後日ぐらいにまた伺うと思います。

ヤマダさんもお元気で！」

先程のやり取りを忘れてしまったかのように笑顔を浮かべた彼女も別れの言葉を口にした。

目礼してくる護衛たちを連れて、久々の来客は俺の住処から離れて行った。

「さてさて」

完全に視界から立ち去って行った事を確認し、俺は小屋へと戻った。

そこには全力で製作した武具が保管されている。

鉄の剣＋１０や、皮の鎧＋１０はもちろんの事、オーク材の弓＋１０や木の矢＋１０など、卑怯極まりない装備の数々である。

いずれも俺のレベル上げのために用意した数々だ。

「取り敢えず全部持っていくとして、今回の目標は、戦闘レベルを最低でも3は上げるとするか」

独り言を呟きつつも装備を身につける。

俺が住んでいる森１４エリアは、戦闘レベル3から8辺りが適正だった。

つまり、レベル9までのレベル上げに最適なわけだ。

次の受注までは彼女の言葉を信じるならばあと2日。

それまでにもう少しレベルを上げておこう。

第二話（前書き）

２０１１年６月１３日
感想にてご指摘頂いていた箇所を修正しました。

第二話

３６日目　日本サーバー　【森１４エリア】

「これでもう勘弁してくれよ！」

現在の俺の周囲には、斬り伏せられたグレイウルフやデスベアーの死体が転がっている。
更にその外側にはファイアやエア、アイスなど様々な魔法で殺害した盗賊たちの死体。
そして罵声と共に発射した矢の進路上には、背中を向けて逃げている盗賊の最後の生き残りがいた。
まっすぐに走る彼の背中に命中し、彼はそのまま倒れた。

「恨むなよ」

短くそう告げ、ファイアを叩き込む。
致命的な攻撃を受けた彼は、為す術も無く強制的な火葬により絶命した。

「まったく、ちょっとした冒険のはずがどうしてこうなるんだよ」

体の中に染み込んでいるスキルの恩恵で機械的に剥ぎ取りを開始しつつ、俺はこの惨状の発端を思い返した。
事の起こりは、思ったよりも好調に終わった出荷まで遡る。
そこで大いに気を良くした俺は、久々にレベルをあげる為に森へと繰り出したのだ。
最初はチョコチョコと姿を見せるグレイウルフを狩っていたのだが、何がいけなかったのか気がつけば集団に囲まれていた。

だが、鍛冶レベルから見れば低いものの、俺はそれなりの戦闘能力を持っている。
危なげもなく殲滅を行うことができたのだ。
「毛皮はこれくらいでいいとして、なんだよ、大した物は持ってねぇな」
剥ぎ取りを完了し、盗賊たちの所持品を改める。
最初の一人目は、思わずボヤいてしまうほどに貧相な所持品しか無かった。
グレイウルフのあとにやってきたデスベアーを何とか始末したところで、奴らは突然現れたのだ。
いや、正確には戦いの最中からこちらの様子を伺っていて、ようやくデスベアーを仕留めたところで襲いかかってきたのだ。
だが、所詮は雑魚。
接近すら許さずに一方的に魔法で攻撃を行い、僅かな時間で虐殺を完了できた。
一息ついたところで隠れていたらしい最後の一人が逃げ出し、冒頭に戻るわけだ。
想定外の大規模な戦闘のおかげで戦闘レベルは６に、魔法レベルも１２にする事ができたのだが、恐ろしく疲れた。
次回のレベル上げは、もう少し敵の出現を察知しやすい場所で行うとしよう。
そんな事を思いつつ、戦利品の回収を終えた俺は、小屋へと戻ることにした。
小屋に戻るなり、早速来客があった。
まったく、少しぐらい休む時間を与えて欲しいものだ。

「ヤマダさんいらっしゃいますか？」

見ればガルダン武器店の使いだ。
一昨日の言葉通りにやってきたらしい。
今回は納品ではなく発注だけなので、荷車などかさばるものはない。

「ああ、いらっしゃい。
仕事の依頼ということでいいのかな？」

営業用の笑顔を浮かべる。
彼女は大切な固定客様なのだから当然である。
この職場兼自宅を維持するためにも、わざわざ商品を受領しに来てくれる商人との関係は良好に保たなくてはならない。

「そうなんですけど、その、すごい格好していますね」

それはそうだ。
俺はつい今しがた激戦を乗り越えて帰宅したばかりなのである。
おまけに、剥ぎ取りを行った関係で全身が血まみれだ。
気の弱い人間ならば見ただけで失神してしまうだろう。

「狩りに出かけたら敵に襲われてな。
毛皮の剥ぎ取りをしたせいでこの有様だよ。
怪我はないんで安心してくれ、それで、仕事の内容は？」

俺がそれなりに戦えることを知っているため、短い説明で彼女は納得してくれたようだ。

「はい、この間発注させていただいた銀の剣と鉄の盾を２０ずつ、

できるだけ前と同じ出来でお願いします。
それと、木の矢を３５０本お願いしたいのですが、一週間でお願いできますか？」

大型案件のお出ましである。
俺の持つ鍛冶スキルからすれば、およそ三日で完了できる仕事だ。
もちろん品質についても、前回と同等ということはせいぜいが＋１なので、これにも問題はない。

「凄い話じゃないか。
どこかの国と戦争でも始めるのか？」

この手の話にはきちんと背景を確認することが必要である。
ガルダン武器店は領主軍にも武器を収める程の身元の確かな店なので、盗賊などに武器が流れる恐れはない。
数量からしても、流れの傭兵団かそれこそ領主軍にでも売りつけるのだろうが、彼らは自前の武器を既に持っているはずだ。
そうなると、考えられるのは戦争の準備か、あるいは装備の更新である。
戦争となればこれはビジネスチャンスだが、物資の統制や戦禍など、こちらにも影響が出てくる事は容易に推測できる。
事前に備える必要があるだろう。

「いやいや、そんな物騒なことがあってたまるもんですか！
先日の銀の剣を献上したところ、領主様にとても気に入って頂けたんですよ。
それで、領主様の騎士団の武器を全てヤマダさんの作った物にして頂けることになったんです！」

実に光栄な話だ。

単なる装備の更新なのであれば、作って納品して終了である。
武器屋として喜ぶべき仕事だな。

「それはそれは、全力で勤めさせていただきたいですな。
代金の方はいかほどで？」

領主が気に入った武器を自分の部下たちに買い与えるとなると、金に糸目を付けずか、名誉を代金として極端な安価かのどちらかでしかない。
前者であればもはや言うことはなく、後者はお墨付きを頂けるということでこれもありがたい。
どちらでもいいのだが、報酬の話は事前に完了させておく必要がある。

「驚いてくださいよ。
なんと、銀の剣一本あたりが銀貨５０枚です！鉄の盾は２０枚、木の矢はまとめてで銀貨５０枚です。
どうです？凄いでしょう」

何故彼女が胸を張っているのかはよくわからないが、大変な金額である。
銀貨１４５０枚となると、分かりやすく言えば金貨１４枚と銀貨５０枚だ。
よくある一般人の生活費に換算すると、確か銀貨5枚が一ヶ月分だったから、ざっくり計算で２９０か月分となる。
繰り返すが、大変な金額だ。

「なるほどなるほど、それで、その単価は領主様がお認めになられる質だった場合というわけか」

この辺りの領地は別に困窮しているわけではないが、それでも金貨１４枚という金額は莫大なものだ。
戦争準備ではないのだとすると、値切られる危険性は高いな。

「それはまあ、そういうのもあるんでしょうけどね。
でも、ヤマダさんの腕ならば、きっと領主様は全額お支払い頂けると思いますよ」

仲介の立場にいるガルダン武器店としても、そう簡単に値切らせはしないだろう。
何しろ、単価が落ちればそれだけ利益も減少してしまうからだ。

「そう言ってもらえるとありがたいな。
じゃあ、早速だけど仕事を始めたいから、一週間後にまた来てくれ」

武器店の使いを見送りつつ、この先のスケジュールを確認した。
依頼の達成のために材料を揃える必要がある。
食料品も少なくなっていたし、面倒だが、街へ買出しに行くとしよう。

第三話（前書き）

２０１１年６月１３日
会話文の主人公の立場についての表現を修正しました。

第三話

３６日目　日本サーバー　【アルナミアの街】

いい加減顔なじみになりつつある衛兵に挨拶をしつつ街に入る。
この街は初期エリアの拠点としてそれなりの規模を誇っていたのだが、生身で訪れてみるとそれなりどころではなかった。
いわゆるヨーロッパ風の家々が立ち並び、それらを取り囲む外壁が建てられている。
そこには目的地でもある専門店街があり、市民が利用する市場があり、その他自治体を構成する様々な施設がある。
村落やただの街では絶対にありえないほどに全てが充実している。
そんな場所に、俺は必要な物資を買い付けるために来ていた。

「しかし酷いな」

街並みのことではない。
先ほどすれ違った衛兵といい、時折見かける巡察といい、装備が明らかに劣化している。
いや、正しく言うなれば、装備の手入れがされていない。
これは一体どういう事なのだろうか？
確かここの領主軍には『鋼のバルニア』と呼ばれる鍛冶レベル３のＮＰＣがいたはずなのだが。

「おい、お前鍛冶屋か？」

すれ違う兵士たちの装備を酷評しつつ歩いていると、不意に声をかけられた。
振り返ってみると、そこに立っていたのは領主直属の魔法剣士隊

員である。

「ええ、まあ」

見たところ年齢は２０歳前後だろう。
見事な金髪を大胆にカットしてしまっている勿体無い美女だ。
名前は確か、エーリアとか言ったかな？
冒険者クエストの序盤でお世話になる人物で、近場のダンジョンの下層階にランダムで出現していたはずだ。
洞窟の下層階で、山の山頂付近で、草原の深部で、彼女はいつも物資不足や整備不足や力量不足で立ち往生している。
それぞれの得意分野で助けてやるのだが、複数のレベルが必要値に達していると、全部で助けてやらなければならないという酷いＮＰＣだ。
攻略サイトでは「雑魚」だの「経験値作成機」だのとあんまりな表現をされていた記憶がある。

「随分と若いが、まあいい。
お前、剣や鎧の手入れはできるか？」

随分と失礼な物言いだが、準貴族である魔法剣士が一般市民相手に言い放つのであればギリギリ丁寧なレベルだろう。
それはさておき、彼女のような階級の人物であっても、その装備は手入れが行き届いていない。
この世界、分業が行き届きすぎており、軍人たちは前線での最低限の掃除レベルしか装備を整備することが出来ない。
鍛冶レベル１で手に入る『武具整備スキル』すら持っていないのだ。

「装備の手入れでございますか？

人並みには出来ると自負しておりますが、何かご奉仕させて頂けることが御座いますか？」

準貴族と言うだけあり、言葉遣いには気をつける必要がある。
無礼討されそうになっても返り討ちにできるだけの力は余裕で持っているが、わざわざ波風を立てる必要はない。
ちょいとばかりただ働きをしてやれば全て丸くおさまるのであれば、そうするのが賢い社会人というものだ。

「できるのならばいい、私の武具を触ってみたいとは思わんか？」

あくまでも上から目線で接したいのであろう。
相当困っているはずだが、それでも俺から頼むような表現を求めていらっしゃる。

「それはもう、魔法剣士様の武具に触れさせていただけるなど、私ごときにしてみれば望外の喜びでございます
そのような機会はないでしょうが、もしあれば末代までの誉にしたいところですな」

もしかして、領主軍に属する鋼のバルニアに何かあったのだろうか？
例えば過労死とか、不慮の事故による負傷とか。
何にせよ、たった一人に頼り切りだった状況が、今回裏目に出ているのだろう。

「ふむ、そうか。
そう言ってくれるか」

どうやら俺は回答を間違えてしまったらしい。

本当にバルニアに何かあったのだろうか？
彼女の装備といい、兵士たちの装備といい、確実に今までとは違う何かがあったのは間違いないはずだ。

「お前、名前は何という？」

これはまずい。
ただ働きフラグが立ちそうな感触を覚える。
その程度で損害を抑えるのが賢い社会人だが、もっと賢い社会人はそれを回避することが出来るものだ。

「いやいや魔法剣士様。
私ごときの名前など、恐れ多くてお耳に入れるわけにはいきませぬ」

速やかに避難しなくてはならない。
何があったのかは知らないが、領主軍に関わるなど、一匹狼の鍛冶屋としてはあってはならないことだ。
ここは一つ、卑屈な男としての唾棄すべき一面を前面に押し出しておくべきだろう。
彼女が単なるＮＰＣではなく人間である以上、極端に気に入られると厄介ごとに巻き込まれる可能性が上がる。
領主様が俺の作ったものを気に入っている以上、今更かもしれないが、それでもだ。

「鍛冶屋よ、私は名を尋ねている。
それとも、領主様の軍勢に名乗れない理由でもあるのか？」

まずいな、どうやら彼女は相当切羽詰まっているようだ。
いきなり険悪なムードになる。

これはまずい、厄介ごとに巻き込まれる可能性が高そうだ。

「とんでもございません。
わたくしめはスズキというしがない鍛冶屋でございまして、魔法剣士様に名乗れるような立派なものではございません」

偽名でもなんでもいい、とにかくこの場を逃れなくてはならない。
しばらくの間は鍛冶屋ギルドの代理人に買い付けを命じるとしよう。
経費がもったいないが、面倒事に巻き込まれるよりはよほどマシだ。

「ヤマダさーん！」

最悪の事態とは、最悪のタイミングで発生する。
例えば偽名を名乗った直後に本名で声をかけられたりな。
声のする方を見れば、先日あったばかりのガルダン武器店の使いがいた。
勘弁してくれよ。

「ほぉう？貴様、魔法剣士である私に嘘をつくか」

エーリア嬢は嫌な笑みを浮かべて剣に手を滑らせている。
するりと抜いた剣で俺を一刀両断する前に腕ごと切り飛ばす自信があるが、そんな事をすればタダでは済まない。
魔法剣士に武力で対抗したとなれば、それが正当防衛であったとしてもこちらが一方的に悪くなるだろう。
限りなく貴族に近い彼女と、どこまで行っても平民である俺との間には、それだけの立場の違いがある。

「ああ、申し訳ございません。
貴方さまの余りの美しさに、動揺して母の名前を言ってしまいました。
私はヤマダと言うケチな鍛冶屋見習いでして、今日の夕飯代にも苦労するような者でございます」

出来る限り卑屈な笑みを浮かべて白状する。
ああもう、めんどくせぇなぁ。

「ヤマダさーん！無視するなんて酷いじゃないですか！
今日は買い付けですか？
領主様の騎士団に入れる武器を作っていただくんですから、買い付けぐらい言ってくれればウチで手配しましたのに。
もちろん、アナタほどの腕を持った鍛冶屋さんに仕入れるんですからお安くしますよ！」

誰か、目の前の小娘を黙らせてくれ。
ペラペラと個人情報を連発しやがって。
個人情報の保護に関する法律に違反した疑いでしょっぴくぞ。
それに、商人を通したらどうやっても利益を取られてこちらの儲けが少なくなるだろうが。

「なるほど、お前があの剣を作ったのか。
それほどの腕で、今日の夕飯にも困るなどと言うのだな」

ゆっくりと鞘から刀身が現れ始める。
これが脅しのつもりなのだから困ってしまう。
しかしながら、ここは異世界のようなオンラインゲームではなく、オンラインゲームのような異世界である。
社会的な地位というものは、個人の力量の差など吹き飛ばすだけ

の圧倒的な力を持っているのだ。

「いや、申し訳ございません。
魔法剣士様の武具を触らせて頂けるのではないかと内心では期待しておりました。
しかしながら、今の私は領主様より命じられた騎士団向け装備の製造を行わなければならないのです」

もう正直に言ってしまおう。
アンタより偉い人から受けた仕事があるから、申し訳ないがただ働きは勘弁してくれ。
大事の前の小事と言うつもりはないが、言いたいことはわかってくれるだろう？

「なあに、あれだけの剣を作れる男ならば直ぐにできるはずだ。
さあ、詰所まで来てもらうぞ」

彼女は満面の笑みを浮かべて俺の腕を掴んだ。
わかってくれなかったようだな。
万が一にでも間に合わなくなったら遠慮無く責任を取らせてやる。

「ああ、親方に伝えておいてくれ。
こっちの仕事次第では納期に間に合わないかもしれないとな。
なんでそうなるかも隠さず説明しておけよ」

恐らくは無償で騎士団の装備をフルメンテナンスなんて、真っ当な人間がやることじゃないぞ。
利益は望めないかもしれないが、必要経費ぐらいは絶対に回収してやる。

第四話

３６日目　午後　日本サーバー　【アルナミアの街】

「そうですか、あのバルニア様がお亡くなりになられるとは。
領主様もさぞかし気を落とされていることでしょう」

作業の合間にさりげなく聞き出せた情報は重大なものだった。
彼女を始め領主軍の整備を一手に引き受けていたバルニアは、ある朝突然息を引き取った状態で発見されたらしい。
死因は不明。
最初は毒殺かと思われたが、それらしい痕跡もなく、前夜も疲れた様子ではあったものの具合は悪そうではなかったそうだ。
結果として原因不明となったらしいが、日頃の様子を確認した俺は、何となく死因を推測できた。
恐らく過労死だろう。
合計で数十人の騎士団と百人を越える兵士。
彼らが日夜使用する武具をたった一人で整備し続けていたのだ。
そんな想像を絶する激務を続けていれば、過労死をしなかったとしても何らかの異常が出てもおかしくない。

「ああ。
しかし困った話だ。
お前が請け負ったという新しい装備も、整備されなければ直ぐにダメになってしまうだろうからな」

それなりの品質のものを納品するつもりだが、まともな手入れもされないのであれば直ぐに使い物にならなくなるだろう。
他の人間に仕事を任せたがらなかったらしいバルニアのおかげで、

領主軍には整備をこなせる人材がいない。
誰かを雇おうにも、今の街には自分の店を持てるレベルの鍛冶屋は俺しかいない。
流れの人間を軍の重要な部門である兵站に入れることは出来ないだろうし、さぞかし困っているのだろうな。
とはいえ、俺には関係の無い話だ。

「はい、お返しいたしますよ」

哀れな同業者の最後を確認し終わったところで剣を返す。
鍛冶屋レベルＭＡＸの俺にとって、武具整備など容易い事である。
本気を出せばエンチャントだのなんだのもできるが、そういった能力を見せびらかすとろくな事にならないので黙っておく。

「え？あ、ああ、ご苦労」

手渡された剣を見た彼女の目が見開かれている。
ちょっと腕が良い程度に見えるようにしておいたが、大丈夫だっただろうか？

「それでは私はここらで失礼します。
早く軍の専属が見つかるといいですね。
えーと、何か？」

エーリアと言葉をかわしつつ振り返った途端、気弱そうな兵士が剣を隠したのが見えたのだ。
あちこちがボロボロな鎧、何かがぶつかったのか歪んだ兜を身につけている。
肩に付けている紋章は巡察を示すものだ。

「何かお困りで？」

残念な表情を浮かべないようにと必死に顔面を制御しようとしているのが容易に見て取れる。

どうやら、俺がバルニアの後任か何かで、全員の武具を整備しにきたと思ったのだろう。

それにしても、何をどうすればここまで装備を傷めつけることが出来るのだ。

「いや、その、なんでもない。

魔法剣士様のお役に立てるとは、お前もツイていたな！」

必死に笑みを浮かべようとしつつそのような事を言われても困る。

それに、見麗しい女性ならばまだしも、泣きそうな表情を浮かべた壮年男性がそれをするというのも勘弁願いたい。

「兵士の皆さんにはいつもお世話になっていますからね。

これも何かのご縁でしょう、もしよろしければ、整備を承りますよ」

あんな装備ではゴブリン一匹にも大苦戦だろう。

これがただのＮＰＣならば無視するのだが、相手は俺の生活環境の治安を維持する兵隊である。

彼らが倒れることがあれば、それだけ街の治安が悪化してしまう。

「ああ、いや、今は手持ちがなくてな」

せっかく声をかけたというのに、つれない返事が返ってくる。

どうやら、先ほどエーリア嬢が手渡した銀貨が自腹だと知って、怖気付いたらしい。

まあ、兵士の月収から考えれば法外な金額だし、当然といえば当然か。
俺は公的に雇われたわけではないので、あくまでも個人の手持ちで支払う必要がある。
そうしてもらう必要があるのだが、目の前の兵士が整備不良で死んでしまうというのも寝覚めが悪い話だ。

「何でも銅貨一枚で整備しましょう。
取り敢えずはその剣ですな」

はっきり言ってただ働きに近いのだが、それはもういい。
作業の合間に領主軍の現場について情報収集を行うことで補填としようじゃないか。
自分の時と明らかに違う金額で仕事を受けたにも関わらず、エーリア嬢は愉快そうに俺のことを眺めていた。

37日目　朝　日本サーバー　【アルナミアの街】

思えばなんと思い上がったことを言ってしまったのだろうか。
このままでは納期に間に合わないかもしれない。
機械的に作業を続けつつ、俺は内心で思った。

「おーい！こっちだ！落とすなよ！」

弓を束で抱えてきた兵士に、俺の傍らに立っていた兵士長が声をかける。

「これはまた、弓が駄目になるたびに予備のものに取り替えて使っ

ていましたね？」

程々に全部ダメになっているということは、つまりそういう事なのだろう。

軍隊らしい贅沢な使い方ではあるが、駄目になった物を整備する能力がない以上、それでは先がないことはわかるはずだが。

「仕方が無かったのだ」

ドルフという兵士長は、無念そうに答えた。

「領主様にお願いしてでもバルニア殿の手伝いができる人間を育てるべきだったのだが、彼は一人で何でも出来すぎてしまった。

今にして思えば、高齢である彼に掛かる負担は尋常ではなかったはずなのに、私を含め彼が初めからいた世代は、当たり前に全てを任せてしまっていた」

一人の天才に全てを委ねると、何かあったときにこうなるという好例だな。

たった一本の柱に支えられているために、それが折れると全てが一気に崩壊してしまう。

「まあ、伝説の魔王軍が目の前に来ているわけではないですし、次はうまくやるしかありませんね」

他人ごとのように言いつつ整備を続ける。

完全に壊れる寸前で交換しているということは、ここの領主軍は少なくとも練度はそれなりのようだ。

能力値やスキルの力で仕事を進めつつ観察する。

今までに見てきたものもそうだが、どれもが完全に駄目になる手

前だった。
つまり、本当に崩壊の一歩手前だったのだろうが、彼らはそこまで現状維持が出来ていたということになる。
自分が住む地域がそのような人々に管理されているという事実は心強い。

「何を言って、ああ、そういえば領民には知らせていなかったな」

そんな不穏な言葉が聞こえたのは、俺が内心で感心しつつ次の弓へ手を伸ばそうとした時だった。

「いいか、ここだけの話だぞ？」

ドルフ兵士長は声を潜めた。
やめてくれ、そんな重要そうな内緒話は俺がいないところでやってくれ。

「隣のナルガ王国から伝わった話だが、魔王が復活したらしい」

その言葉に思わず手が止まる。
大陸の東側にあるナルガ王国から伝わったということは、さらに東の海に浮かぶ群島か、あるいはその上下に位置する大砂海に出現したという事だろう。
ゲームの知識からすると、恐らくは群島に出現するはずである。
原作、というか元の世界というか、とにかくゲームの中では数百のプレーヤーがランダムに撃沈される輸送船に分乗して強襲上陸を仕掛けようとしていたはずだ。
参ったな、プレーヤーキャラクターに比べて格段に雑魚しかいないＮＰＣたちでは、奇跡が起こっても勝てるはずがない。

「失礼ですが、その情報は確かなもので？
魔王が復活したとなれば、それだけでこの大陸もタダでは済まないはずです。
その割に、私の身の回りに限って言えば特に異常はないのですが」

魔王復活イベントが発生すると、モンスターの出現率が飛躍的に増大する上に、各地でプレーヤーを強化するための特殊イベントが続発するようになる。
少なくとも、ゲームではそのような仕様になっていた。

「そりゃそうだ。
俺達が体を張って領民には被害が出ないようにしているからな」

何とも頼もしい回答だ。
装備の急激な消耗具合からしてハッタリではないだろう。

「そのようなお話を頂けたとなれば、自分も微力ながら全力を尽くさせていただきますよ」

俺は背筋を伸ばし、整備を続行した。
結局この日も丸一日を費やすことになったのだが、その充実度は昨日までとは全く異なるものであった。

第五話（前書き）

２０１１年１１月５日
頂戴したご指摘を参考に、エンチャントについての記載を追加しました。

第五話

３７日目　朝　日本サーバー　【アルナミアの街】

微力ながら全力を尽くした翌日、俺は詰所の仮眠室で目覚めた。
夜遅くまで掛かった整備の後に、ささやかな礼として一室を借りることができたのだ。
手の届く範囲内の武具はあらかた直すことができたと思う。
一泊の礼を言いたかったのだが、ドルフ兵士長は既に今日の巡察に出発した後だった。
モンスターの出現率が増大した今、兵士たちは恐怖の２交代制で治安維持に当たっているらしい。
これに加えて騎士団は２４時間の待機任務に付いているというのだから恐れ入る。
元ＮＰＣと一線を引いた形でしか見ることの出来なかった兵士たちの知られざる一面を目にし、俺は一つの決心が付いていた。

「銀鉱石に鉄鉱石に、金鉱石もいるな。
それ以上の素材はさすがにやめておこう」

彼らが兵士として担当地域の治安を命がけで守るというのであれば、俺も命を賭けよう。
領主軍に召し抱えられるかもしれない、いつかは現れるであろう英雄の付き人にされるかもしれない。
運が悪ければ、現れない英雄の代わりに連合軍に徴用されるかもしれない。
ひょっとしたら、技能と在庫を尽く供出させられるかもしれない。
だが、身近なところで命を賭けてくれている人々に全力で答えないのは、男ではない。

「どうも、銀鉱石と鉄鉱石、あと金鉱石ありますか？」
鍛冶ギルドに顔を出した俺は、第一声から仕事モードだった。
俺の他にまともな鍛冶屋がいないこの街では、ギルド支部の規模もそれ相応に小さい。

「いきなりでご挨拶だなヤマダ。
ここは小さいとは言っても鍛冶ギルドだぞ？」
名前を知らないので取り敢えず支部長と呼んでいる支部長兼受付である彼は、嫌そうな表情を浮かべて答えた。
確かに気が急いていたとはいえ失礼だった。

「失礼しました。
領主様からご依頼を受けてかなりの数の武具を収めないといけなくなりまして。
どれくらい在庫がありますか？」
謝罪と事情の説明、そして質問を極めて短く行う。
作るだけならばそれほど時間はいらないが、質を上げたりエンチャントを行うとすると時間がかかってしまう。

「儲かりそうな話じゃないか。
今あるのはこれくらいだが、足りるか？」
途端に表情を緩めた支部長は、在庫表を手渡してくる。
なるほど、失敗が許されないと仮定すれば必要な量があるな。

「手持ちの在庫と合わせれば何とかなりそうです。

申し訳ないですが、全部下さい」

金貨五枚を手渡す。

自分で採取する分には丸儲けだが、原料を購入するとなると厳しいのが鍛冶屋の世界だ。

鍛冶ギルドは全国の支部を取りまとめる組織で、各地の鉱山を使用する権利を持っている。

彼らはそれぞれの王家や領主から使用権を購入しており、そこで手に入れた鉄鉱石などの原料をギルド員に販売する。

俺たち鍛冶屋、つまり鍛冶ギルド員は、鉱山を使わせてもらうか購入するかして原料を仕入れ、それを元に武具を製造するわけだ。

ちなみに各地の鉱山は山岳地帯にある関係からモンスターの襲撃にあいやすいので、戦士ギルドや魔術師ギルドで雇った冒険者を護衛として配置している。

当然無料ではなく、有料で、それも一定期間ごと契約更新をしてだ。

そうして作られた装備を商人ギルドが買取り、販売して利益を手に入れる。

そして王家や各領主はそれら全てから税金を徴収するわけだ。

ファンタジーな世界でも経済らしいものは存在するんだな。

「全部かよ、豪勢なことだが、いや、まあいいか。

バルニアさんも来なくなったおかげで、お前以外に鉄鉱石以上を買おうとする奴はいなくなったしな」

支部長は苦笑しつつ金貨を受け取る。

いつものとおり、原料は全てギルドで配送してもらう。

持って歩くための道具を持っているのだが、慎重に調べた結果、そういうゲームらしいアイテムは他に存在していないらしいためだ。

「はい、じゃあこれが配送料ということで、ああ、もちろん護衛も付けてくださいよ」

追加で銀貨３０枚を手渡す。

一般家庭からすれば目も眩むような大金が次々とやり取りされていくが、俺もギルドも儲けは莫大とまではいかない。

いや、やり取りという言葉は正しくないな。

俺が一方的に払い続けている。

「あと炭と、ハンマーも痛んできたのでお願いします」

必要なものを発注しつつ、商人ギルドと結託して総合商社を作れたら大いに儲かるんだろうな、などと妄想を弄んでみたりした。

いわゆる大商人と呼ばれる人々が既にそれを実現している以上、あとから来た俺がその地位に行くことは果てしなく不可能に近いのだが、妄想は自由だ。

「いやーヤマダさん！探してましたよ！」

収支を考えると気が滅入ってきたところで背後から声をかけられた。

振り返ると、通りの向こうに店を構える食料品店の店主が笑顔で立っている。

「助かります、次に伺おうと思っていたんですよ。

一週間分の食料、あと酒もお願いします。

配送は鍛冶ギルドの荷車に放りこんでおいてください」

生きるのには金がかかる。

特に、街から離れた場所に暮らす俺は、一度に多額の現金が必要

となってしまう。
分かってはいるが、辛い現実だな。

３８日目　朝　日本サーバー　【森１４エリア】　ユーザーハウス

自宅に戻った俺は、直ぐに生産を開始することにした。
魔王が本当に復活したと確認をとったわけではないが、それでも現状は非常にまずい。
領主軍が崩壊する前に手を打たなくてはならない。

「銀をベースに鉄鉱石を混ぜて、金で装飾を入れてエンチャント効果を一つだけ付けておくか」

持てる限りの技能とスキルを駆使して納品物を強化する。
銀の剣と指定された以上、それ以外を納品することは生産者として間違っている。
だが、銀の剣なのであれば、そこにありったけの技術と能力を注ぎ込んだとしても、問題は起こらない。
いや、どうしてこんな物が作れるのかという問題は起こるだろうが、それはもういい。

「付けるとすれば、スタミナ回復（小）かな」

エンチャントの効果とは、実に多彩なものがある。
半永久的な効果を付けるにはそれなりの条件が必要になるが、俺には素材もレベルもある。
金や銀を装飾として付けることにより、俺の鍛冶レベルに応じた

様々な能力を付与することができる。
もちろん時間や製作難易度による成功率といったものもあるが、よほど強力な能力をつけるのでなければ、好きなように付けることが可能だ。
選べる効果には、スタミナ回復や自動回復といった使用者に作用するものもあれば、威力増大や耐久力回復といった武器自体に作用するものもある。
もちろん基本である属性付与や特定の魔法を使用可能になるといったものも可能だ。

「さすがに＋4はやり過ぎだから、3でやめておくか」

脳内で目指すべき完成予想図を創り上げていく。
今回作成するのは、とても貴重な、だが世の中に二つとして無いとまではいかない装備だ。
＋3やエンチャントが施された武器というのは、大きな街の武器屋に行けば必ずと言っていいほど売られている。
数が多いわけではないが、優れた鍛冶屋というのは過去も含めればそれなりにあるのだ。
俺が作る予定の武具に異常性を見出すとすれば、騎士や兵士たちの戦闘力向上と継戦能力の維持を両立を明らかに目的としている点にある。

「盾の方も同じ方針にすればいいとして、矢は普通に＋3なだけで十分だな」

実は、矢のように弓と組み合わせれば効果を倍加させたり多数持たせられる物の方が作る側としては面白い。
しかしながら、男気に答えるにしても物事には限度というものが

ある。
過ぎたるは及ばざるが如しという諺のとおり、無敵の軍団を創り上げてウチの領主様に乱心してもらっても困るし、後先を考えないバカが装備目当てに強盗を働いても困る。
それに、仮に連合軍を作って魔王に攻め込むとなれば、装備の力だけに依存しているような軍隊はまず生き残れない。

「おい、鍛冶屋、確かヤマダ、とか言ったか」

あれこれと考えつつ鍛冶場に立っていた俺に、不意に声がかけられた。
玄関や窓を施錠していたわけではないのでしょうがないが、隠している素材や装備からすれば無用心にもほどがあったな。
内心で反省しつつ、剣に手をやって振り返る。
そこに立っていたのは、見るからに負傷している血まみれの兵士だった。

「大丈夫ですか！？」

立ってられないとまではいかないにしろ、それなりに負傷しているらしい。
改めてよく見ると、昨日最初に剣を整備したあの壮年の兵士だ。

「時間がない、直ぐに荷物を、直ぐに逃げるんだ」

俺の見立ては間違っていたらしい。
ぼんやりとした目付き、ぎこちない言葉遣い。
それなりどころではない、かなりの重傷らしい。
頭上の体力ゲージを見ると、六分の一程度しか残っていない。

「何があったんですか？とにかく座って！薬草とかそういうの在庫ありますから！」

念の為に窓から離れた場所にある椅子に強引に座らせ、隣室に置いてある荷物袋に走る。

いわゆるインベントリにアクセスできるこれは、外見からは全く予測できないほど多くのものを入れることが出来る。

ゲーム中では出先でクエストクリアに必要なアイテムを作成したり、そのための大量の素材を持ち運んだりする関係で、鍛冶スキルが高いとその容量はさらに大きくなる。

そう言った次第で、豊富な品揃えの店を一定期間やっていけるだけの種類と量のアイテムを保管しているのだ。

「薬草じゃあ間に合わない、こっちだな」

俺が取り出したのは一本の瓶だ。

体力回復の薬草には弱・中・強と三種類があるのだが、この三種類に加えていくつかの薬を混ぜることで、液状の回復薬が作成できる。

これは飲んで良し患部に直接かけても良しと使い勝手が良く、状態異常や呪いなどが掛かっていなければ一発で怪我を治せるのだ。

「失礼しますよ」

兵士の怪我に回復薬を直接かける。

装備も汚れてしまうが、それは非常時ということで勘弁してもらおう。

「お、おい、痛たた！痛いぞこれ！」

効果はあるのだが、どうやらしみるらしく、兵士は非常に痛そうな表情を浮べていた。
だが、先程までの痛みが麻痺しつつある状況からすれば、明らかに回復に向かっているのだから勘弁してほしい。

「痛いのは生きている証拠ですよ。
もう大丈夫、秘蔵の回復薬を使いましたから、怪我は治ってますよ」

こんな猛スピードで怪我を治したら副作用がとんでもないことになりそうだが、まあ、ファンタジーなのだろう。

「すごい効き目だな、確かにもう痛みがない。
いや、そんな事はどうでもいい、直ぐに逃げるぞ！」

怪我が治ったことを確認した彼は、すぐさま立ち上がった。
これは余程の緊急事態のようだな。

「分かりました、武器を取ってきます」

まずは素直に従うことが生き残る第一歩である。
再び隣室に戻り、インベントリから剣と盾を取り出す。
鎧を着込んでいる時間はないので、気休めに兜も身につけておこう。

「行きましょう、貴重品は全部身につけてます」

急かされるまでもなくドアへと急ぐ。
彼の戦闘レベルは2だが、兵士というのは基本的に単独では行動しない。

その彼が重傷を負わされたということは、それなりの敵が近くにいるということだ。

「話が早くて助かる、急ぐぞ！」

先導するようにして彼はドアから飛び出し、直後に戻ってきた。

何事だろうか？

「なあ、あの回復薬、まだあるか？」

どうやら負傷者が他にも出ているようだ。

これはもう、相当の緊急事態だぞ。

「在庫はあります。

怪我人が他にもいるんですね？」

鍛冶スキルで出し惜しみなしだと思ったら、それだけでは収まらないようだ。

まったく、今日はどうなってるんだ。

第六話

３８日目　朝　日本サーバー　【森１４エリア】

駆けつけたとき、そこは戦場だった。
俺の家から約１０分の距離にあるちょっとした空き地では、３人の兵士たちが２０を超えるモンスター相手に決死の戦闘を行なっている。

「戻りました！加勢します！」

俺をここまで連れてきた兵士が剣を抜きつつ戦闘に参加する。
おいおい、避難させてくれるんじゃなかったのかよ。
内心で呆れつつ、片手に剣、空いた手に回復薬を装備する。

「こっち来るな！」

俺にターゲットを変更したらしいグレイウルフを切り飛ばし、その勢いで倒れているドルフ兵士長に接近する。
親指で栓を飛ばし、傷口目がけてそのまま中身をぶちまける。

「高価な回復薬です、もう大丈夫ですね？」

こちらの様子を伺っているオークを睨みつつ尋ねる。
症状を確かめる余裕がなかったので毒も麻痺も治す効果なやつを使っただけあり、彼は既に立ち上がろうとしていた。

「加勢に感謝する」

横から接近しつつあったゴブリンに手痛い一撃を浴びせつつ、彼は答えた。
何ともタフな事だ。
「これだけのモンスターが一体どこから？
ああ、つまりはこれがそういうことなんですね」
以前聞かされた内緒話を思い出す。
魔王は本当に復活しているようだ。
そうでなければこんな何も無い森の中に種類が豊富なモンスターの一個小隊など出現するわけがない。
「そういうことだ、鍛冶の腕は疑っていないが、戦えるのか？」
愚問である。
返答代わりにオークとの距離を一瞬で詰め、スキル『二段斬り』を繰り出す。
今の俺は戦闘レベル６である。
これはＮＰＣでは絶対に届くことない領域だ。
オークの両手を切り飛ばし、スキル『蹴りつけ』でスタン状態に追い込む。
「こう見えて、戦闘には」
言葉を切り、振り向きざまの遠心力も借りて背後から迫るゴブリンの頭部を切り飛ばす。
会心の一撃っているやつだな。
「ちょっとばかり自信があるんですよ」

迫るゴブリンの集団に向けてファイヤを連射する。
魔法は基本的に念じた相手に必中の攻撃手段であり、このような乱戦時には非常に有用な攻撃になる。
三体のゴブリンたちが炎に包まれつつ地面に崩れ落ちる。

「それでちょっとなら、俺は自信喪失だな」

強者が味方に加わった余裕からか、ドルフ兵士長は笑みを浮かべつつ先ほど負傷させたゴブリンに止めを刺す。
他の兵士たちは四人がかりで剣や槍を繰り出して被害を出さないように戦っているようだ。
それが助かる。
敵が自由に身動きできない一角ができるということは、それだけこちらが自由に行動できるという意味になる。
それはＭＭＯＲＰＧだろうがリアルタイムストラテジーゲームだろうが、多分現実の集団戦闘でも変わらないだろう。

「大サービスですから見ておいてください」

五体ばかりオークが固まっている方に片手を向ける。
魔法は意識だけで照準を行うこともできるが、隙を作ることを許容して手で狙いを付けると威力が１．２５倍になる。

「悪く思うなよ」

覚えている限りの攻撃魔法を唱える。
ファイア、エア、ウォーター、アイス、ブレード。
唱えるたびに炎が上がり、烈風が吹き荒れ、高圧放水が襲いかかり、敵の一部が凍結し、光り輝く魔力の塊が切り裂く。
魔法抵抗など出来るはずもないオークたちは、見るも無残な屑肉

の集まりに変わり果てた。

「どぉぉぉぉりゃぁ！！」

雄叫びに思わず視線を向けると、ドルフ兵士長がグレイウルフを一撃で一刀両断するところだった。

さすがに役職付きなだけあり、彼はそれなりに能力を持っているらしい。

「残りは！？」

全神経を集中させていたのか、彼は我に返るとこちらに尋ねてきた。

２０体以上の敵がいたわけだが、ごく短時間にこちらは１１体を仕留めている。

剣を構えつつ敵情を伺うと、残りは９体。

そのいずれもがゴブリンである。

「あと９体！いや、あと３体か」

どうやら一番敵の圧力に晒されていたのはここらしい。

敵集団の後方から駆け寄ってきた魔法剣士達が速やかに６体を仕留めている。

「ドルフ！無事か！？」

先頭は、あのエーリア嬢のようだ。

とても失礼なのだが、それなりに役に立つのか、などという感想を抱いてしまった。

３９日目　夕方　日本サーバー　【森１４エリア】　領主軍野戦陣地

モンスターたちの攻撃は、極めて広範囲に渡って行われたらしい。
そのような状況の中、休憩に入ったばかりの者まで含めて召集された領主軍は、現在のところ辛うじて組織的抵抗を継続できている。

「はい、剣の修理完了。鎧はさっき終わったし、これで何とかなりますね？」

傷が癒えたばかりの兵士に整備した武器を返す。
ナルガ王国との国境付近に急造された陣地に俺はいた。
あの戦闘の後、モンスターたちが攻め寄せてくる方向に誘導されつつ、気がつけば俺はここにいた。
俺が所属するジラコスタ連合王国は、なし崩し的に魔王軍との全面戦争を開始することになっていたらしい。
俺を含めて国内の鍛冶屋は全て召集されることになったらしく、こうして最前線でハンマーを振るっている。
まあ、あとで呼び出されるよりは最初から召集されている方が立場的に有利なので仕方がないが、釈然としないものを感じる。

「すいません鍛冶屋さん。ありがとうございます」

子供のような顔つきの、いや、実際１５か１６程度らしい若い兵士は、笑顔で礼を言ってくる。
ナルガ王国の急激な崩壊に伴い、事実上の開戦奇襲を受けた我が国は、常備兵力の増強を行う時間的余裕が与えられなかったために、いきなり窮地に立たされているらしい。
再訓練も無しに召集された予備兵力、最低限の訓練だけで投入さ

れた若年兵、そして職場から無理やり徴収された俺たち技能者。
突然の末期戦である。

「いいから、死なないでくださいよ。
戦争は確実に長く続きます。
その中で、貴方達は確実に重要な位置を占めているんですからね」

意図せずとして国家総力戦が始まった我が国では、第一次動員の兵士たちがどれだけ前線を維持できるかで今後が決まる。
国境線が後退すればするほどこちらはどんどん困窮することになり、訓練が不十分な兵士たちしか補充されなくなる。
生まれながらにして戦士であるモンスターたちが相手なのだから、そうなれば人類に明日はない。

「私の出来る限りの能力を注ぎ込みました。
戦闘は楽になるはずです。
酷い言葉であることは自覚していますが、とにかく死なずに、少しでも長く戦ってください」

手渡した剣は鉄の剣＋４だ。
今までの俺ならば、絶対にやるはずがない行動である。
だが、この戦争は確実に長く続く。
我が国の安全を確保し、崩壊したらしいナルガ王国を奪還し、海岸線に防御陣地を構築し、魔王領土へ橋頭堡を築く。
そこまでいって、初めて人類は反撃を開始できる。
残念ながら、先は長い。

「ヤマダ殿！すまない、怪我人だ！」

即席の担架に載せた怪我人が運び込まれる。

戦時なのだから日頃でかい顔をしている神殿関係者を動員してくれよ。
そんな大人気ないことを思いつつ、俺はインベントリから取り出した回復薬を片手に声のする方へ歩み寄っていった。
この世界に来たと知った当初は、歴史の影に埋もれるようにしてひっそりと生きていこうと決めていた。
だが、人間臭いというよりは明らかな人間である元ＮＰＣたちを見ていくうちに、俺は知らず知らずのうちに決断してしまっていた。
俺はＮＰＣの中にいる唯一のプレーヤーキャラクターではない。
社会を構成する一人に過ぎないのだ。
能力的には非凡ではあるが、一人で出来ることというのは驚くほど少ない。
だから、目立たない程度に有能な人間として生きていこうと思ったのだ。
しかしながら、今は戦時。
手を抜けば、それだけ人々が死んでいく。
少しばかり出し惜しみの基準を緩めるだけでも、人類の苦労は相当減るだろう。
俺も死にたくない以上、ある程度の面倒は受け入れようじゃないか。

第七話

３９日目　早朝　ジラコスタ連合王国　前線基地　西側陣地

兵士たちが駆けまわり、騎士たちが命令を怒鳴り続ける。

とにもかくにも戦争だ。

現在の我が国は常備兵力に総動員をかけ、常設の守備隊を全て国境付近へ移動させつつあるらしい。

最低限の戦力だけを残し、巡回などは全て各ギルドからかき集めた冒険者たちで賄うのだそうだ。

それは普通は逆ではないかと思うのだが、冒険者たちが軍隊と同時行動を取るための訓練を兼ねているというのだから驚く。

真っ先に最前線に拠点を構えた我らが領主様の軍勢を中心に、最終的にはいくつかの砦をずらりと並べるのだとか。

騎士たちの話を盗み聞くと、既に各国が魔法通信（そんな便利なものがあるそうだ）で連絡を取り合い、国際連合軍のようなものを組織する方向で話が進んでいるとか。

「お疲れ様です。

昨晩より西側陣地を警備しておりましたが、異常はありませんでした。

以上、報告を終わります」

いわゆる後方支援に携わる我々鍛冶屋は、基本的に日の出と共に目覚め、日の入りと共に課業を終了するという生活をしている。

戦闘を繰り広げる兵士たちの装備を直し続けなければならないため、ある程度体調に配慮したシフトとする必要があるからだ。

もちろん何事につけても例外はある。

例えば、開戦初日である昨晩は、人手不足のために俺も含めた戦

闘経験のある鍛冶屋が臨時で警備を行うこととなったのだ。

「え？ああ、お疲れ様。
それじゃあ後は我々がやるので休んでくれ」

敵国に面している東側に比べて格段に安全な位置であるここで問題など起こるはずがない。
それはそうなのだが、引継ぎに来たのが明らかな新兵だったというのはなかなか衝撃だ。
見れば全員の戦闘レベルが1のようだ。
これでは安心して眠ることは難しそうなのだが、取り敢えずのところ日中は安全に違いないので、後は夜に考えることにしよう。

「それではよろしくお願いします」

敬礼という文化がないため、頭を下げてテントへと歩き出す。
今日は一日休みをもらえたということもあるし、取り敢えず仮眠を取って、それから彼らの動きを観察するか。
単なる鍛冶屋でありながら相当に出過ぎたことを思いつつ、俺は自分に与えられたテントに到着した。

「これはこれは？何か私めに御用でしょうか？」

技能職だということもあり、鍛冶屋はそれなりに優遇されている。
自分の工房からある程度の道具を持ち込むことも許可されているし、兵士たちが天幕で雑魚寝している中、個人用のテントも与えられている。
俺も例外ではなく、荷物を家から運び出す余裕は時間的な理由でなかったが、自分用の場所を持っているのだ。

「おお、返事がないと思ったら向こうにいたのか」

俺のテントの前にはエーリア嬢が立っている。

何故だろうか、とても良くない感じがするな。

「お前が手入れをしてくれた装備はとても良かったよ」

手を加えた人間として、そう言ってもらえる事はとても光栄であるが、それだけでわざわざ俺を探しに来るだろうか？

いや、実際には答えてもらうまでもなく理由はわかるのだが。

「そう言っていただけますと、腕を振るったかいもあるというものです。

今日も何か御用でしょうか？」

今後も武具の手入れを俺に任せたいというところだろうが、早合点は危険である。

「いや、なに、お前の能力を私は高く買っている」

直ぐに本題を切り出さないということは、どうやらそれ以上に面倒な話のようだ。

「誠にありがとうございます。

エーリア様にこうも言って頂けるとは、鍛冶の神に感謝したいところです。

ですが、これだけはないのですよね？」

最悪の場合で領主軍の専属として召抱え、最良の場合でエーリア嬢の個人的専属といったところか。

どちらに転んでも行動の自由が失われるので勘弁してもらいたいな。

「うむ、我が領主様からのお言葉を伝える」

そこでエーリア嬢は姿勢を正す。

合わせて俺も背筋を伸ばすが、内心では最悪の事態になったことを確信して憂鬱になる。

今は亡きバルニアに全てを任せていたウチの領主軍は、現在のところ他の街からかき集めた鍛冶屋を使って整備を行なっている。

だが、他の領主軍が集合すれば、そちらの力を借りることになるだろう。

そうなれば、領主を名乗っておきながら軍の一つもまともに維持できないのかと大いに威信を損なうことになる。

「領主軍筆頭鍛治の任を与える。

軍の装備を維持し、後任を育てよ。

期限は一年とする」

バルニアに依存していたことは認めるが、代わりの人間など当然見つけていて、そしてさらに改善しようとしている。

我らが領主様はそのようなストーリーで進めるつもりらしい。

領主をしているだけあって無能ではないらしい。

「謹んで承ります。

それで、筆頭鍛冶とはどのような役職なのでしょうか？」

よくわからない地位であるからには、確認することはとても重要だ。

名前からして鍛冶に関わる部門の部門長のようだが、名前と責任

だけ立派な下っ端の可能性もある。

「鍛冶の長だ。
今はお前しかいないが、認めるものがいたらこれを領主様の名において雇う権利がある。
必要な道具があれば、領主軍の予算で購入することもできるぞ」

自分の部門限定とはいえ人事権まで与えてもらえるとは大したものだ。
それに、道具についても経費で落とすことが出来るというのも破格の扱いと言えるだろう。

「とはいえ」

あまりの厚遇に内心で感激していると、エーリア嬢は苦笑しながら後を続けてきた。

「戦地にいる以上、当面は雇おうにも軍以外の人間と会う機会自体がないだろう。
この非常時だ。軍人を引き抜くことは本人が同意したとしても無理だ。
それに、給金はもちろん支払うが、何かを作ったり直したりする事についての報酬はない。
お前自身が得るものは少ない」

それはまあ、そうだろう。
ここは極めて遺憾なことに最前線だ。
そんなところにわざわざ腕に覚えがある人間が来るとは思えない。
金についてもそうだ。
領主の部下になるということは、つまり身内になるわけだ。

身内から報酬を得ることは出来ない。

「得るものはありますよ。
とても大きなものが、ね」

領主軍が戦闘力を失えば、今までの生活は永遠に戻ってこない。
別の地域へ避難したところで、この国が落ちればまた逃げなくてはならなくなる。
逃げて逃げて、どこまで行っても最後には戦うか死ぬかを選ぶ時が来るのだ。
そんな可能性に賭けるぐらいならば、今ここで踏みとどまれるように全力をつくすべきである。
もちろん、国家レベルで言えば、俺は自分が戦略的な価値を持っていると自惚れるつもりはない。
だが、この地域に限定して言えば、俺はたった一人のマトモな腕を持つ鍛冶屋であり、ここで踏ん張る価値は十分にある。

「確かにな。
腕のいい鍛冶屋がいてくれれば、我々も遠慮無く剣を振るえるというものだ」

難しい話を抜きにしてしまえば、まさに彼女の言葉のとおりだな。
前線の兵士達が目の前の敵だけに集中して戦うことが出来る。
それだけ実現してしまえば、あとはいずれ集まってくる増援部隊が後を引き継いでくれる。

「ええ、遠慮はいりません。
思う存分戦ってきてください、あとはこちらが何とかしますよ」

緒戦はいいようにやられているが、ここで敵の進行を止めること

が出来れば、万金に価する『時間』という貴重な資産を手に入れることができる。
時間さえあれば、我々は増援部隊を展開させ、敵のこの大陸での支配地域を最小限に抑えることができるだろう。
後は英雄様でも国連軍でもどちらでもいいので、そちらにお任せしてしまえばいい。

「頼もしいことだ。
じゃあ、軍議にいくぞ」

色々と妄想を弄んでいたことがいけなかったのだろう。
気がついたときには、俺はエーリア嬢に手を引かれて領主様の天幕へと連行される最中だった。

第八話

３９日目　朝　ジラコスタ連合王国　前線基地

会議は踊るとは有名な言葉だが、有名なだけあってそれは実際に起こりうる。

議題が重要であればあるほど、参加者たちの発言力が同等であればあるほど、上位者が決断できなければできないほど、会議は踊る。

現在の議題は、友軍が到着するまでの防衛方針である。

領主様を筆頭に、ライス・ヴェル騎士団長、アラバン・エルドナ兵士隊長、そして筆頭鍛冶の俺が参加メンバーだ。

「ですが、何度も申していますように、今のままでは守り切ることは出来ません」

何度目かになる主張をエルドナ兵士隊長が述べる。

彼の主張は、現在のペースで兵士たちの疲労が蓄積されると、数日で撤退すら困難になるというものだ。

別に兵士たちが弛んでいるからではない。

休む間もなく波状攻撃を仕掛けてくるモンスター相手に連戦を強いられているために、休息を取る隙がないのだ。

『結界石』や『回復護符』といった、疲労を回復するためのアイテムは当然存在する。

だが、それらのアイテムはあくまでも消耗品であり、数に限りがある。

アルナミアの街から補給を受けることは出来ているが、そもそもが冒険者向けの物であり、軍隊の大量消費をいつまでも支えられる備蓄はない。

「そうは言ってもだな、ここで我々が引くわけにはいかんのだ。
諸侯軍が到着するまでの時間を稼がなければ、我が国自体が立ち行かなくなる」

対する意見をヴェル騎士団長が述べる。
彼の主張は分かりやすい。
要するに死守だ。
とはいっても、これは彼が頭の固い融通の効かない人間であるためではない。
ジラコスタ連合王国は、縦に長いこの大陸の北東に位置している。
その直ぐ東に先日崩壊したナルガ王国が、更に海を渡ったその先には魔王領がある。
南と西にはそれぞれ大河が走っており、南西には巨大な湖が横たわっている。
つまり、援軍は直ぐにはやってこれない上に、一度敵の手に落ちてしまうと、奪還が困難になる。
ナルガ王国が警報機としての役目すら果たせずに崩壊した結果、今ここで敵を食い止められないと、一気に大陸の北東地域全域が制圧されてしまうのだ。

「それは私も理解しています。
しかしながらその方法がありません。
もちろん私も兵たちも、ご命令とあれば最後の一人になるまで戦います。
ですが、それでも一週間を稼ぐことが出来るかどうかが精一杯でしょう。
そうしろというのであれば従いますが、そうなった後、誰が街の人々を守るのですか？」

兵士隊長は当然のことを言っている。
何も決まっていないよりはマシなのだが、それでも大まかな方針だけではこちらの劣勢を覆すことは出来ない。
それを実現させるための方法がない以上、引けるうちに撤退するべきだと主張しているのだ。
確かに、援軍が来ることが分かっている以上、籠城は悪い手ではない。

「だから、全滅しないための方法を探すために集まっているのではないか。
とはいえ、確かにうまい手が見つからないのも事実ではあるな。
筆頭鍛冶、先程から黙っているが、何か意見はないのか？」

おいおい、そこで俺に話を振らないでくれよ。
元の世界でどこかの軍隊の指揮官でもやっていたのならば少しは役に立てたかもしれない。
だが、俺は民間人でサラリーマンでしかなかった。
確かにいわゆるミリタリーオタク的な趣味を持ってはいたが、それだって趣味レベルの話だ。

「はい、騎士団長様。私はあくまでも鍛冶屋ですので、お恥ずかしいことですが軍のことはよくわかりません」

生兵法は怪我のもとである。
経験もないのにうろ覚えの知識で適当なことを言っても恥をかく以外の効果はない。

「そうは言うが、先程から随分と熱心に地図を見ているじゃないか？
まさか、地図ではなくて、テーブルに興味があったとでも言うつもりかね？」

よく見ていらっしゃる。
確かに俺は先程から広げられた地図をずっと見ていた。
ファンタジーな世界にありがちの適当な作りのものだが、それでもこの世界で軍事目的で使用される精度だ。
脳内に表示される衛星写真並に高精細な周辺マップと組み合わせて考えれば、取るべき方法を思いつかなくもない。

「いやはや、こうもお見通しですと、言い訳をするだけ無駄のようですね。
何か私でもお役に立てることがないかとお二人の話を聞きながら地図を見てはいたのですが、ろくな手が思いつきません」

気分転換に話を振ってみたのだろうが、頼むからプロが素人に意見を求めないでくれ。
とはいえ、このまま回答を拒否し続けると機嫌を損ねてしまうおそれがある。
何か適当に愚策でも答えておくか。

「そうですね、素人考えではありますが、いくつかは思いつきました」

その言葉に二人がこちらを見る。
先程まで黙っていただけに、何を言い出すのかが楽しみなのだろう。
ケチをつけまくってストレス発散に使っていいから、もう二度と話は振らないでくれよ。

「そうですね、ええと、三つほど提案があります。

まず一つですが」

地図上の川が狭くなっている地点に指を置く。

「敵が攻めてくる道を見定め、そこに警戒する兵を置くというのはいかがでしょうか？

昨日の戦いしか見ていませんが、モンスターどもはある程度まとまった数でやってきています。

逆に言えば、一回攻めてきた後には、少し時間が開きます。

地図によれば、川は幅があり、自由に渡ることは難しいでしょう」

地図上では適当に引かれている川だが、脳内マップによると、狭まっている場所以外での渡河は難しそうだ。

集団で渡河を行うとなれば、なおの事この地点以外は想定しづらい。

「ああ、警戒する兵といっても、そこで全てを受け止めるわけではありません。

彼らには敵が川を渡ろうとしているかどうかを見張ることと、味方が駆けつけるまで生き残ることを仕事としてもらいます」

つまり、二重の防衛線を引くのではなく、本隊を呼び出すまでもない敵を食い止め、それ以上が現れた時だけ増援を要請する部隊を作るわけだ。

このいわゆる警戒陣地を作ることにより、敵の行動と規模を素早く把握し、常に全軍出撃という無駄を省くことが出来るはずだ。

「騎士団長様、騎士の皆様では、この距離はどれくらいかかりますか？」

川原からこの前線基地までを指で辿りながら尋ねる。
騎士と名乗るだけあり、彼らは全員が騎乗している。
突撃が成功した場合の破壊力はかなりのものだが、降りて剣士として戦っても十分な強さはある。
もったいないことではあるが、機動力のある歩兵として考えるのもありだろう。

「うむ、詳しくは実際に試してみないとなんとも言えないが、大体15分といったところか」

この15分とは地球のものと同じである。
ゲームの仕様がそのまま適応されているのは興味深いところであるが、取り敢えず今は置いておこう。

「それでしたら、兵士を10人程度ここに置いておきましょう。
少し手持ちの兵力が少なくなりますが、ここで二つ目の提案です」

口を開こうとした兵士隊長を見つつ言葉を続ける。
ローテーションを考えると、そんな事をすればこの基地の防衛戦力すら不足しかねないといいたいのだろう。

「私は『多重結界石』を幾つかもっています。
もちろん、皆様が想像した通りの物のことですよ」

俺の言葉に一同の眼の色が変わる。
一晩で疲労を完全に回復できるのが結界石であるが、これは睡眠しつつ一晩を過ごす必要がある。
確かに大変に便利な道具なのだが、その上位機種である多重結界石はさらに優れた能力を持っている。
こいつは効果範囲の中にいれば、起きていようが寝ていようが関

係なく、一時間程度で全回復できるのだ。
言うまでもなく、これは大変に貴重なものだ。
鍛冶レベルを25以上に上げた時に開放される生産物フラグを別に取得しなければならない。
生産物フラグというのは、要するに鍛冶レベルに応じて作れるものを個別に増やしていくという事だ。
出来るだけ長い時間をプレイしてもらうため、そしてゲーム内でのインフレを避けるための苦肉の策なのだろうが、こいつのおかげで鍛冶レベルは非常に人気がなかった。
まあ、市場に流通しているものがあるかもしれないが、たしかゲーム内通貨で金貨五十枚ほどだったはず。
こんな地方の領主軍では、購入を検討することすら無かっただろう。

「これを騎士団に一つ、兵士隊に一つ、最前線に一つ、合計で三つ提供します。
よほど連戦を強いられない限りは、これで疲労については心配なくなると思います」

疲労を消し去るという形で無視できるようになれば、取れる戦術の幅は大きく広がる。
今まで以上に多くの兵士を一度に投入できるようになるし、警戒できる範囲をかなり広げることが可能だ。

「それで、三つ目の提案とやらはなんなのだ？」

領主様が突然会議に参加してきた。
今までが無言だっただけに、いきなり口を挟まれると不安になってくる。

「冒険者と猟師を何人か、私の部下に加えてほしいのです。
素人でなければそれでいいです」

筆頭鍛冶である俺の質問に、領主は首を傾げる。
そうだろうな、確かに説明不足にも程がある。

「ああ、別にどこかへ戦いに行かせたいわけではないのです。
今使っているこの地図を実際に現地に派遣して確認させ、可能であればより詳細なものにしておきたいのですよ」

恐らく、俺の脳内にあるマップを書きだせば最も正確なものが出来るはずだ。
しかしながら、軍事用の地図よりも詳細な物を持った民間人など不自然にもほどがある。
これから鍛冶という本業の世界では人間業を超えた活躍をしなければならないのだから、これ以上目をつけられるような事は慎まなければならない。

「地図が大切であることを否定するつもりはないが、それは今やらなければならないことなのか？」

兵士隊長の気持ちはわからんでもない。
増援がもらえるのであれば自分たちに回してもらいたいという気持ちがあるのだろう。
それはわかるのだが、今回だけは勘弁してもらおう。
敵の先遣隊程度しか来ていない今のうちに、出来る限り国境線のこちら側は確認しておかなければならない。

「はい、兵士隊長様、これは地図の確認を兼ねた偵察です。
本当に見張るべき場所はここだけでいいのか、モンスターどもは

これ以上入り込んでいないのか？
これだけは絶対に確認する必要があります」

システムに縛られたゲームとは違い、渡河できる場所が一箇所とは限らない。
万全の体制を整えたつもりで背後から奇襲をかけられるなどという醜態は絶対に避けたい。

「まあ、言わんとするところはわかる。
我々としても敵がどこから来るかがわかれば随分と楽になるしな。
領主様、私は問題はないと思います」

あっさりと納得してくれたのか、兵士隊長は俺の意見を肯定してくれた。

「何だ、こうも具体的な策を持っているのであれば、もっと早くに言ってくれればいいものを。
今後はそういう遠慮は止めるのだぞ」

肯定の意味を含んだ言葉を発しつつ、苦笑した騎士団長が会議を切り上げようとする。
現代の軍隊の戦術を拙いながらも応用し、多重結界石というファンタジー極まりない物を持ち込むことで、確かに問題は解決できそうだ。
あとは領主様が俺の意見をどうするかだが。

「意見は出尽くしたようだな。
それでは、筆頭鍛冶の意見を採用する。
騎士団長、兵士隊長、直ぐに部下たちを動かせ」

思っていたよりも我らが領主様は話せる人物のようだ。
絶望的な状況下において、これは僅かながらもいい話だな。

第九話

４０日目　昼　ジラコスタ連合王国　国境付近の川　警戒陣地

「もう少し前だ！そう、そこ、下ろせ！」

即席の柵を埋め込む兵士たちの声が飛び交う中、俺は多重結界石の設置を行っていた。

俺の意見が全て採用されたことにより、主力の前に警戒部隊を配置することとなったのだ。

「それではよろしく頼む」

冒険者たちが兵士に命令を伝えられ、地図を片手に森の中へと入っていく。

ここはいわゆる警戒陣地であり、少数の敵であれば撃退できる程度の、言い方を変えれば一瞬では全滅しない程度の戦力が置かれている。

我が方の戦力が全く不十分である以上、地形障害を活用しつつ、騎士団を使った機動防御を行うしか方法はない。

「筆頭鍛冶殿、このようなものでよろしいでしょうか？」

設置工事を監督していた年配の兵士が尋ねてくる。

視線を向けると、今直ぐに水浴びしたくなるような綺麗な浅瀬だったそこは、最前線の香り漂う陣地へと姿を変えていた。

「素晴らしい出来です。一旦休憩して、今度は私たちが使う施設を作りましょう」

施設と言っても、別に立派な宿舎を建てるわけではない。
多重結界石の周りに天幕を張り、雨風を防げるようにするだけだ。
最終的には恒久陣地としてのそれなりの設備も作ってやりたいところだが、余りに露骨にやりすぎていいことはない。

「しかし、筆頭鍛冶殿は素晴らしい腕をお持ちですな。
普通、鍛冶屋といえば剣や鎧の類を扱うだけのはず。
それが筆頭鍛冶殿ときたら、薬に魔法具に、このような柵まで作り出せてしまうとは」

だいぶ調子に乗りすぎてしまっていたようだ。
まあ、今更のことなのでどうしようもないのだが。

「あれこれと思いつくままに手を出したかいがありました。
時間ができたら小屋でも作りますかね」

確か三階建ての住宅までは生産フラグを開放していたはず。
鍛冶レベル→建設スキル→生産フラグ→住居と、開放までに必要だった経験値を思い出すと今でもうんざりする。
もちろんだが、以前使用した回復薬も、作り出すためには鍛冶レベル→薬学スキル→生産フラグ→回復薬となる。
開発会社としては最初の方向性を生産・剣・魔法で分けたかったらしいが、だったら鍛冶ではなくて生産と書いてくれればよかったのだ。
おかげで、リリース当初は鍛冶レベルを上げて回復薬を作るという、一見すると意味不明な流れを初心者に説明するのが大変だった。

「よし、設置完了」

規定の手順に基づいて多重結界石の設置を終えると、すぐさま淡い光が灯り始める。
これでよし。
あとは明かりの設置を急がせれば、徹夜で全員を働かせることが出来るな。
決まった賃金で、２４時間連続で、そして毎日働く労働者。
全ての産業資本家たちの夢が、このファンタジーな世界で実現しようとしている。

「気持ちよく働いてもらうためにも、夕食には興奮剤を入れておくか。
あとは弓矢だが、ああ、武器の製造は主力陣地でやらないとまずいな」

あれこれと考えをめぐらせつつ建設現場を見る。
川岸のこちら側の防御柵、構築完了。
多重結界石、設置完了。
休憩用天幕、展張中。
陣地周囲の防御柵、地ならし中。
食事用の釜戸、石積み中。
うむ、予定していた進捗よりも１０％増しといったところかな。
三日以内に最低でも１０人が週単位で駐屯できる施設を構築しなければならない。
そうでなければ、提案者にして責任者でもある俺は、未完成の陣地を置いて主力陣地に武器の整備のためだけに戻らなくてはならない。

「橋をかけるか浚渫か、早いところ決断しないといけないな」

取り急ぎは斜面を切り崩して乗り降りをやりづらくしている川原

を見つつ、視点を先に広がる旧ナルガ王国領土へと向ける。
空は相変わらず憎々しいほどに澄み渡っており、街道の先から立ち上る土煙が見えるほどだ。
うん、あの様子からして、全力疾走の馬車かよほどの大軍でも来ているんだろうな。
うん？

「総員作業中断！作業員は全員直ちに主力陣地まで退避！」

冗談じゃないぞ、こんな中途半端な状況で敵の攻撃を受け止められるものか。
せめて非戦闘員だけでも逃しておかねばならん。

「狼煙上げろ！伝令も出せ！
街道に土煙を確認、大規模な敵軍の可能性あり、騎士団の出動を要請する。続報を待たれたし。以上だ」

俺が声を張り上げると同時に傍らに現れた年配の兵士に命じる。
彼は頷くと、さらに後ろに来ていた伝令兵に同じ内容を伝える。
伝令兵はオウム返しに復唱し、すぐさま待機している馬の所へと駈け出していく。

「わかっているな？まずは弓だ。
俺が前に出て様子を見るから、いきなり剣を抜いて突撃したりするなよ」

極めて残念なことに、兵士たちのレベルは低い。
軍人としての練度などではなく、いざ攻撃だ防御だとなった場合に響いてくるレベルの事である。
五十体くらいまでなら、相手にもよるが一人で何とかなるかな。

そんな事を思いつつ、俺は剣を構えて街道を見た。
そして叫んだ。

「避難民だ！飯を炊け！」

こちらに向かってくるのは、どうやら敵軍ではなく旧ナルガ王国の避難民だったらしい。
やれやれ、恐らくは出撃してしまったであろう騎士団に戻るように伝えなくてはな。

４０日目　夕方　ジラコスタ連合王国　国境付近の川　警戒陣地

「報告します」

兵士たちが力を合わせて馬車をこちら側に押している光景を眺めていた俺に、例の年配の兵士が報告する。
何かを言ったわけではないのに、使うものと使われるものの区分けの大切さを知っているようだな。
いや、これはこの世界の人間たちに対して余りにも失礼だったな。

「炊き出しの準備は整いました。
我々に余裕があるわけではないですが、取り敢えず温かい汁物は用意できました」

満足の行く仕事ぶりだ。
現状把握もできている。
こういう奴が下士官を勤め続けてくれれば、俺も気持ちよくここで任務に全うできるな。

「ご苦労様。
食べ物は私が責任をもって補充します。
それで、あちらのお嬢様が私に用があるんですね？」

七台で縦隊を作っていた馬車たちの中心にいた、ひときわ豪華な馬車。
見るからに高貴な人間が乗っていそうなそれには、文句のない人物が乗っていた。

「はい。私も以前に見たことがあるから間違い無いと思います。
ナルガ王国、ああ、もう旧ですが、そこの王女殿下に間違いありません」

やれやれ、最前線で亡国の王女様と出会うなんて、なんてロマンチックなんだろう。
今すぐ勇者様が来ておいしいところを全部持って行ってくれないかな。
馬鹿な事を考えつつ、最後の馬車がようやくこちら側に進みだしたところで、俺は後ろから声をかけられた。

「ちょっと、そこのアナタ」

ああ、面倒くさいな。
なんで俺がこんな貴族にしかできない様な事をしなければならないのだ。

「失礼致しました。
ナルガ王国第一王女、アイリーン・アルレラ＝ナルガ様」

この世界に来てから見た貴族たちの動きを思い出しつつ、丁寧な礼を行う。
何も言われないところを見ると、どうやらハズレではなかったようだな。

「あら、どうやら貴方はマトモな教育を受けているようね」

よしよし、第一印象は思っていたよりも悪くはないらしい。

「どう？あんな胸だけ立派な領主に仕えるのはやめて、私の配下に加わらないかしら？
先に教えておいてあげるけど、ナルガ王国復興の暁には、男爵として召抱えてあげてもよろしくてよ」

評価してくれるのは有り難いが、断っても従っても問題を生みそうなことを言うのはやめて欲しい。
じいは、じいはおらんのか。
王女殿下を止めてくれ。

「私ごときにはもったいないお言葉、感激の極みにございます。
されど今は有事。
私なぞは捨て置き、まず王女殿下にあらせましては安全な場所へお戻り頂き、諸王に何があったのかをお話頂きたく」

やれやれ、貴族の言葉は難しいな。
これであっているかどうかも判断がつかない。
とはいえ、今はしたくもない俺の栄達よりも、人類全体の利益が最優先だ。
何があったのかを理解する暇もなかったかもしれないが、それすらもが我々にとっては万金に勝る貴重な情報になる。

魔王軍がこちらに対処する時間を与えずに国を滅ぼす存在だと分かるだけでも、打てる手は無数にあるだろう。
逆に、勇戦虚しく僅差で敗北したとわかれば、それはそれで全人類を奮い立たせる。
じゃあ今度は人類の総力を挙げ、無慈悲な無停止攻撃により残虐な魔王軍を粉砕してやればいいだけなのだから。

「勇敢なだけではない、貴人に対する態度も知っている。
そして、頭も回れば無欲」

頭を垂れ続ける俺の向こうで、王女殿下は何やら言っている。
いいから早く、後方へ撤退してくれ。

「決めたわ。
私は直ぐに諸王を引き連れてここに戻ってくるわ。
その時まで貴方だけでも生き残っていなさい。
いいわね？その時貴方はあの胸だけの領主の下僕ではなく、この私、アイリーン・アルレラ＝ナルガの騎士となれるのよ」

どんだけ体にコンプレックスを感じてるんだよ。
大体アンタだってCはありそうなもんじゃないか。

「はっ！非才の身に有り余る幸運。
このヤマダ、感激の極みにございまする！」

一応感謝していることだけは伝えておこう。
今後の展開次第で、彼女が本当に俺の上司にならないとも限らないからな。

「さあ騎士様、可及的速やかに王女殿下を安全な場所へ。

この道をそのまま進めば主力陣地です。お急ぎを」

有無を言わせない口調で近衛騎士たちに命じ、部下たちの作業の監督へ戻る。

時間は有限で不可逆だ。

一秒でも早く人類が早く反撃に移れる可能性があるのであれば、手間や苦労を惜しんではいけない。

これは、恐らくはこの世界初めての総力戦だ。

一切の人としての心を捨て、全人類が全体を構成する一つの部品としての役目を全うしなければならない。

何人いるのか調べたことはないが、赤子から老人まで、組織を構成するすべての人々が、全てを捧げて任務を全うする。

圧倒的劣勢らしい今こそ、全ての個は自分を捨て、全体の幸福のために奉仕しなければならない。

それこそが、最終的に全ての個人に幸福を返す結果となるはずだ。

第十話

４１日目　朝　ジラコスタ連合王国　主力陣地　鍛冶屋たちのテント

「皆さんお元気なようで何よりですね」

日が昇るなり最前線から戻った俺は、早速面倒を見なければならない鍛冶屋たちの所へ足を運んだ。

火力を上げる途中の炉。

並べられた武器たちは、地面に敷かれた布の上で自分の番を待っている。

そして、手に商売道具を持った鍛冶屋たち。

うん、文句の言いようがない仕事ぶりだな。

「これは筆頭鍛冶殿。

お早いお着きでしたな」

主任のような立場を任せている年配の鍛冶屋が歩み寄ってくる。

名前は、なんと言ったかな。

「確か、オーロスさんでしたね？

準備の方は整っているようですが、これは貴方が？」

感心した様子を全面に出して尋ねると、名前を覚えていたことが嬉しかったのかオーロスは嬉しそうに表情を歪めた。

「ええ、この一大事に怠けているわけにはいきません。

私も若い連中も、いつ筆頭鍛冶殿がいらっしゃっても大丈夫なように準備をしておりました」

全ての士官が求めてやまない有能な下士官がこちら側にもいるとは、恵まれすぎて怖いな。
彼らならば、俺の持つ全ての技能を教えるつもりで教育を施しても大丈夫だろう。

「それじゃあ早速はじめましょう。
実際に直しながら説明させてもらいますよ」

上位者、というよりは師匠として認めてくれているのであれば、誰が上かを教えるなどという非効率的な儀式は必要ない。
直ぐに実践的な所から始め、彼らが一人前の鍛冶屋、というよりは武器科隊員として独り立ちできるようにできるはずだ。
武器科、つまり一般的な表現にすると武器整備員の人数が確保できれば、それだけでこの地域の安全性はかなり高まる。
そうなれば、思っていたよりも最前線に長くいることができるかもしれないな。

「ありがとうございます。
お前ら！筆頭鍛冶殿が早速私たちに技を披露して下さるそうだ！
全てを見て、そして覚えろ！」

若い鍛冶屋たちに怒鳴るその姿は、どこからどう見ても見事な軍曹ポジションである。
若者たちは（俺も若いほうなのだが）飛ぶようにして俺の元へと駆け寄ってくる。
いつまでも喜んでいないで、彼のような人材が自分が下に付いてくれる幸運を活かさなくてはな。

「それでは直ぐに仕事を始めましょう。

ああ、口調は癖なので気にしないでください。
炉の温度をもっと上げて、それとこの素材の数では全く足りないので補給を要請してください。
金が足りないならば全て私が出します」

彼らが一刻も早く一人前、せめて半人前の人材として活躍できるようにならない。
やれやれ、せめて管理職手当ぐらい欲しいものだ。

「さあ、もう一度やってください」

作業開始から八時間。
密かにここにも設置してある多重結界石のお陰で、彼らは休むことなく作業を兼ねた訓練を続けていた。
手本を見せ、手順を説明し、壊れた剣で実習してもらい、最後に総括をする。
そして次の手本を見せ、手順を説明し、以下繰り返しという恐怖の鍛冶教室の開幕であった。
最初のうちこそ有り難そうに見ていた兵士たちだったが、終わることのない実習と繰り返される丁寧語での命令に次第に恐怖感を覚えたらしい。
気がつくと、代表者らしい者を除いては、武器の受領の時以外は誰も近寄らなくなっていた。

「あの、筆頭鍛冶殿」

密度の濃さ故に遥かな昔に感じられる午前中を思い起こしていると、オーロスが傍らで笑みを浮かべていた。
ああ、ええと、今は確か【武器整備スキル：中級（弓矢の整備）】

の実習だったか。

「すみません、次にやる実習の内容を再確認していました。
全員終わりましたね？」

当然のように尋ねる。
俺の下に付けられた鍛冶屋たちは、全員が初級の刀剣整備までは出来るだけの能力を持っていた。
そのため、効率よく【スキル：教導】を発揮することができ、結果として彼ら全員が整備士としては今すぐ独り立ち出来る状況になろうとしていた。

「刀剣に始まって槍、弓矢、鎧兜に小手まで。
それ以外にもまだあるのですか？」

そんな驚いたような表情を浮かべてもらっても困る。
大体お前も教わる一人だろうが。

「それはもちろん、このあともまだまだ続きますよ」

たかだか八時間程度の訓練で音を上げるとはだらしない。
多重結界石があるとは教えていないが、明らかに肉体的な疲労が無いことは身を持って理解できているだろうに。

「待て」

内心はさておき気持ちよく仕事をはじめようとしたところで、後ろから待ったが掛かった。
振り返って見てみると、神聖僧兵を連れた神官様のようだ。
整備待ちの兵士たちを威圧感だけで排除しながらこちらへ近づい

てくる。

「これはこれは神官様ではありませんか！
このような場所にお越しいただけるとは、どのような」

どのようなご用件でしょうかと言おうと思っていたのだが、喉元につきつけられた錫杖がその先を許さない。
なんだよ、せっかく御用商人も真っ青の美辞麗句を並べ立ててやろうとしたのに。

「お前がヤマダだな？」

断定口調で質問される。
いいえ、それはペンですと返してもいいのだが、悪ふざけは止めておこう。

「ええ、ええ、偉大なる神官様にお名前を覚えていただけるとは光栄でございます。
それで、本日はどのようなご用件でしょうか？」

せめてもの抵抗として、背筋を伸ばしたままで対応するとしよう。
兵士たちや鍛冶屋たちに余りにもみっともない姿は見せられん。

「お前が作ったという回復薬の製法と持っている素材。
全て神殿に出せ。
我らの神聖にして絶対である回復魔法に匹敵するかもしれん回復薬など、外法によるものに違いない。
教えてやらねばわからんだろうから言ってやるが、二度と作るなよ」

あまりにケツの穴が小さい発想に基づくその言葉に、俺は驚愕した。
この有事に、既得権益の保護を最優先にして全体の利益を無視する行為を行うとは、驚いたものだ。
長い金髪も豊かな胸も、そして今日からファッション雑誌の表紙を飾ってもおかしくない美貌も関係ない。
こんなクズは今すぐ取り巻きごと全員殺さなければなるまい。
俺に同意するように、彼女の背後にいる兵士たちは殺気を顕にしている。
何時死んでもおかしくない死闘を厳しい訓練レベルにまで落とした俺の活躍は、彼らが身を持って知っている。
それを本人達以外は決して理解出来ないであろう理由でやめさせようとしているのだ。
彼らが怒りを抱かないわけがない。
確実に血が流れるであろう展開になったところで、俺は意外なことに気がついた。
眼の前の神官様を守るように展開している神聖僧兵たちは、どういうわけだか困惑しているようなのだ。
もしかすると、これは彼女の独断なのかもしれない。
試してみよう。

「それはつまり、ジラコスタ連合王国に対する神殿からの正式なご要望ということですよね？」

俺の言葉に、神官は表情を歪める。
聞かれたくないことを聞かれたのだろう。
ならば、話の落とし所は決まったな。

「私の説明が不足しており誠に申し訳ございません。
現在のところ私はジラコスタ連合王国レーア・アルレラ＝アリー

ル辺境伯の筆頭鍛冶を努めております。
要職にある私にこうもされるわけですから、当然連合王国側との話はついていたんですよね？
連合王国国王陛下や我が主君であるアリール辺境伯閣下をはじめ、主だった方々と話がついていなければ、大変なことになります」

にこやかに話す俺に対して、神官の表情は固い。
通すべき筋を通さないで勝手に動くからこうして恥をかくんだ。
どういうつもりで事に及んだのかは知らないが、薬が欲しけりゃ書類を持って来い。
まあ、事態がそこまで進んだら俺は逃げるがな。
製薬マシーンとして監禁されたまま生涯を終えるなんていう夢のかけらもない人生は勘弁してもらいたい。

「神官様がそこまでお考えでないはずもなく、当然ですが文書による命令書もありますよね。
何しろ、話がついていなくて、命令書もなくて、一国の辺境伯家に対してこのようなご無理を仰るなんてことがあるはずもありませんからねえ」

そっちがバックを持ちだして脅迫するのであれば、こちらも同じ事をさせてもらうまでだ。
さて、どうしてくれるかな？
部下に命じて強行するか、おとなしく引き下がるか、個人と個人の話に持ち込むか。

「おや、神官様、どうなされました？
そういえば、命令書がまだでしたな。
私もそれさえあれば何も言うことはありませんが、それがなければ、おわかりですよね？」

そこまで言うと、俺は喉元に錫杖を付き付けられたまま、命令書を受け取ろうと片手を伸ばした。
反応からして、目の前の彼女は絶対に独断で動いているはずだ。
関連している全てに話が付いているのであれば、このような脅迫のような行動を起こす必要はない。
上位者を通じて命令を出し、あとは俺が荷物を引き渡した運送者が到着するのを待っていればいいのだ。

「まあまあ筆頭鍛冶殿、神官様も今日は書類をうっかりお持ちではないかもしれません。
そこまで言ってしまうのは失礼ですよ」

周囲の空気が完全に凍りついたところで、助け舟が出た。
俺は決めたぞ。
彼は今日から誰が何と言おうとも軍曹だ。

「ああ、オーロス、ありがとうございます。
神官様、そのような状況と理解してよろしいでしょうか？」

俺は最初にして最後の救いの手を差し伸べる。
ここでうんと言わないと大変なことになるぞ。
ジラコスタ連合王国は前線を支える国家ということで立場が強いんだ。
それに加えて魔王軍の侵攻という有事なのだから、我々の背後には諸王連合がある。
いかに神殿の権力が絶大だったとしても、この有事に諸王連合の行動を妨害するような行動を取ったとなれば大変だぞ。

「あ、ああ、確かに今日は命令書を持っていなかった。

それではお前も気持ちよくは仕事ができないということなのだな？」

おお、こうも素直にごめんなさいを言ってくれるとは思わなかった。

思っていたよりもいい娘じゃないか。

「はい、決して神官様に他意があるわけではないのです。

しかしながら、私は規則を守る側の人間です。

部下たちの手前、どうしてもしかるべき手順が踏まれていなければ動きたくても動くことが出来ません。

ご理解いただければ幸いでございます」

これぐらいにしておこう。

余りに虐めると彼女が可哀想だ。

「神官様はお帰りのようです。

オーロス、申し訳ないですが陣地の外までお連れしてください」

俺の言葉にオーロスは曖昧な表情で、だがしっかりとした動作で頷き、神官の方へ歩み寄っていく。

彼には何かお礼をしよう。

金銭か物品か、あるいは技術かはさておき、最低でもその程度はしなければなるまい。

「ようやく収まったようだな」

神官をにこやかに見送っていると、背後から声をかけられた。

振り返ってみると、苦々しい表情を浮かべた我らがエルドナ兵士隊長が立っている。

「これは兵士隊長殿。何かございましたでしょうか？」

白々しく質問すると、彼は表情を不機嫌そうに歪めたままで口を開いた。

「あの神官だがな、ここに来る前に領主様にもあの調子で失礼な口を叩いていたのだ。

まったく腹立たしい限りなのは否定しないが、あの態度はまずくないか？」

どうやら、先ほどのやり取りを最初から見ていたようだ。

気持ちはわかるが、俺が損得勘定のできない子供だと思われるのも癪に障るな。

「いやですなあ兵士隊長殿。

私は何も自分の意志で神聖にして不可侵たる神に仕える親愛なる神官様に逆らっていたのではありません。

おはようからおやすみまで、何をするにしてもまずは書類。

それがなければ動けないというのは基本でしょう？」

まるでどこかの島国の公務員のような話であるが、この世界はそうなのだ。

八百屋で野菜を買ってくるというお使いクエストですら依頼書と進捗状況、そして報告書があったという仕様がそのまま現実になったのだろう。

おかげでこういう場合には無茶を聞く必要がなくて助かる。

まあ、困っている人を助ける程度の話であれば、俺は喜んで勝手

に動くのだが。

「まったく、職人とは思えないほど口が達者だな。
それはいいとして、あの神官は多分また来るぞ」

不機嫌そうな表情を苦笑に変えたエルドナは、神官が送られていった先を見ている。
ようやく陣地の外にある馬車にたどり着いた彼女たちは、慌ただしくどこかへと出発を始めたところだった。

「そうでしょうね。
ここは一つ、神官様に失礼を働いた責任を取って、最前線送りにでもしてもらいますか」

俺の提案は彼にとってよほど意外だったらしい。

「神官は来るだろうが、あの回復薬も、もちろんお前も、神殿などに渡すわけがないだろう。
まあ、言い方が悪かったのは否定できないが、それでも気にしなくていい」

即座に反論が返ってくる。
おまけに、見返りを求めているにしても随分とこちらの事を買ってくれているようだ。

「ありがとうございます。
しかし、私が今回の一件で危険極まりない最前線へ送られたとなれば、神殿側としては少なくとも面目だけは保てるでしょう。
そして、そこまでした以上、領主様へこれ以上の面倒は来なくなる。

兵士たちには事情を説明するまでもなくそのうち私が戻ってくるわけですし、回復薬は素材さえ貰えれば向こうでも作れます」

予め考えておいた策を説明すると、エルドナ兵士隊長はにんまりと人の悪い笑みを浮かべた。

どうやら、何かが彼の心の琴線に触れたらしい。

「そして、独断で動いた挙句に明らかに連合王国に不利益をもたらす原因となったあの神官様は、確実に罰を受ける。

それが抜けているぞ」

悪い人だ。

確かに俺はかなりの確率でそのような結末になると予測したが、口に出さない程度には善人だった。

それなのに彼ときたら、こうもはっきり言ってしまうとはね。

後に調査が入った時、この話をすぐ傍で聞いている兵士たちは、きっと有ること無いこと言いふらしてしまうだろう。

嗚呼、名前も知らない神官様の未来に幸少なからんことを。

第十一話（前書き）

２０１１年１０月１７日修正
貼り付けミスにより冒頭部分が抜けていたため修正しました。

第十一話

４２日目　朝　ジラコスタ連合王国　国境付近の川　警戒陣地

「任務ご苦労さまです」

久しぶりと言うには余りにも短すぎる時間で俺は最前線に帰還した。

できれば土産に増援を連れてきてやりたかったところだが、諸王軍の増援がまだ到着していない以上、主力陣地からこれ以上の戦力を引っ張ることはできない。

陣地設営に携わる作業員や多重結界石に各種の増強ポーションなど、戦力以外の所で支援するしか無い。

作業員といえば、せっかく陣地設営の経験を積んでくれたことだし、出来れば彼らは工兵としてそのまま雇いたいところだが、領主様はうんと言ってくれるだろうか。

「これは筆頭鍛冶殿ではありませんか。

お忙しい中再びお越しいただきまして申し訳ございません」

多重結界石を覆うようにして張られた天幕から出てきた曹長が頭を下げる。

まあ、曹長というのは俺の勝手な呼び方なんだがな。

「いえいえ、できることをできるだけ、が私の信条ですからお気になさらず。

それと、今日から暫くはこちらに専念できるようになりました」

俺の回答に曹長は探るような表情を浮かべる。

「それはまた、何か問題でもありましたか？」

自分の仕事ぶりにケチが付いたとでも誤解させてしまったのだろうか。

違うかもしれないが、とにかく思いついた可能性は潰しておこう。

最前線で下士官と不仲になるなど最悪にも程があるからな。

「まったく、後方からお偉いさんが気軽に来れるところは疲れます。

神殿から偉い神官様がいらっしゃったのですが、神官に代わって治療をしていた事があまり好ましくなかったようでしてね。

領主様からやんわりとではありますが、こちらに専念するように言われてしまいました」

実際にはやんわりとどころか、問題が解決するまで主力陣地には立ち寄らないで欲しいと言われてしまったのだがな。

そんな事を言われはしたが、仮にも一国の辺境伯を務めているのだからそれなりの発言力はあるはずだ。

彼女とその部下たちが俺の能力を必要としているうちは、なんとか守ってくれるだろう。

なんにせよ、結果として俺は警戒陣地の増強に全力を投入できることになった。

というのも、俺が取得していた教導スキルにより、俺の部下に付いた全員に武器整備スキルを覚えさせることに成功したからだ。

まあ、俺が凄いというよりも、武器整備スキルは初級から中級までの取得はどんな職業でも簡単にできるのだが。

製造の方はまだ手付かずだが、当面は手持ちの武器の整備だけ出来れば問題ないからな。

「とりあえず現状を教えてください。

ここはとても重要な場所ですからね、やれる事は早いうちに全て済ませておかねばなりません」

とは言っても、たった一日ではそれほどは変わらないだろう。

ここにはかなりの初期投資を行ったが、だからといって全ての問題が解決できるだけの余裕が出来たわけではない。

「はい、それでは筆頭鍛冶殿、こちらへ」

先導するように前を歩き出した曹長の後に続きつつ、俺は陣地内部の点検を始めた。

取り敢えずで真っ先に川原に向かい始めた辺り、彼は俺と話している間に視察の経路を素早く策定したのだろう。

そういえば、こいつの名前なんだったかな。

「異常ありませんか？」

最初にやってきたのは川原に設けられた防御柵だ。

一箇所だけ出入りできるように可搬式の障害物が置かれているだけだが、それ以外の部分は俺が満足出来るだけの頑丈さを持っている。

今も柵の向こう側では泥を塗り固める作業が行われており、加えて川岸に近い所では浚渫の真似事のような作業も同時並行で行われていた。

土壁を作るために泥はいくらあっても困らないし、１ｃｍでも多く水深を増すことが出来れば、それだけ敵の進撃を遅めることができる。

また難民が来る可能性もあるが、まあ、一箇所だけは進入路を用意してあるし、そこを通ってもらうしかあるまい。

「これは筆頭鍛冶殿！」

弓を片手に川の向こう岸を睨んでいた女性兵士がこちらに気づいて表情を緩める。

うん、美人さんにそうしてもらえると俺も嬉しいな。

それにしても、この世界は何かと美人さんばかりでありがたい。

「ご苦労様です。

特に異常はないようですね」

作業は順調に行われており、向こう岸に置かれた哨兵にも変わった様子は見受けられない。

現在の担当は第二分隊。

総勢五名からなる彼女たちは、一人を哨兵として向こう岸に置いており、残りが川の此方側で弓を片手に警戒している。

本当であれば一つの分隊に十人前後は置いておきたいところなのだが、数の問題でそれは実現不可能な夢となっていた。

しかし、この渡河地点は幅だけでも３０ｍ近くあるわけだが、いくら人数が少ないとはいえこんな少人数でよく陣地を作ろうと俺も思ったもんだ。

「はい、今のところ少数のモンスター以外は目にしていません。

いずれも、その時の当番で排除できました」

うん、いいことだ。

たった十体程度のゴブリン相手に毎回騎士団が全力出撃をするなど無駄にも程がある。

こうして警戒陣地を置くことで、その種の無駄は無くすことが出来るのだ。

やはり、長い歴史の果てにルール化された事柄には無駄がないな。
「警戒を続けてください。
そして、無理は絶対にしないように」
念のために付け加えておく。
ここはあくまでも警戒陣地なのだ。
組織的抵抗を継続しながらの遅滞防御戦闘程度はしてもらわなければならないが、死守は彼女たちが果たさなければならない任務ではない。
俺の言葉に彼女は表情を引き締めて頷く。
誰もが理解していることだが、死ぬことが任務として求められていない以上、彼女たちは死を選択肢として選ぶことはできない。

「おお、だいぶ順調なようですね」
川原を離れた俺たちは、その後も陣地の各所を視察した。
森との境界線で行われている除草作業はだいたい終了しており、防壁と言うよりは境界面を示すものレベルだが防御柵の設置も順調だ。
これでよほど油断しない限りは不意打ちを食らうことはないだろう。
主力陣地へ通じる道の開墾は一日二日でどうにかなるレベルではないが、それでもこちらの陣地側から地道に枝葉の伐採を始めている。
「ん？」
下草が大雑把ながらも刈り取られた道を見ていると、視界の先か

ら何かが接近してくるのが目に入った。
遠くてまだ判別はできないが、主力陣地からこちらに向かってくる以上、敵とは考えにくい。

「なんだと思います？」

傍らの曹長に尋ねる。
いかんな、どうしても彼の名前を思い出せない。

「ちょっと遠くて難しいですが、敵であればもっと急いでこちらに向かってくるはずです」

似たような感想ではあるが、もっともな意見が付いている辺りがさすがである。
こちらの意表を突いた奇策という可能性もないではないが、そもそも我々は人間とは戦っていない。

「一応、何人か連れて出迎えましょう。
真面目に仕事をしていないと思われるのも嫌ですからね」

誰かを呼ぼうと振り返りつつ言ってはみたが、曹長がそれを予測していないわけがなかった。
彼は俺と話しつつ、出迎えが決まった段階で何人かに合図をしていたらしい。
休んでいたはずの兵士たちが二人、こちらに向けて駆けつける最中だった。

「ありがとうございます。
それでは行きましょう」

４４日目　朝　ジラコスタ連合王国　国境付近の川　警戒陣地

「なんとまあ、頼もしい光景ですね」

曹長を傍らに置いた俺は、眼前に広がる光景を眺めつつ率直な感想を漏らした。

結論から言えば、先日やってきた集団は、やはり増援部隊だった。

我が国と大河を隔てて西側に位置するアルーシャ王国から先遣隊として、王立騎士団なる人々が到着したそうなのだ。

その数なんと三百騎。

人数だけで言えば一個大隊に相当する。

さすがにこれだけの人数の増援を受けることが出来れば、多少の増援を送り出す決心もつくというものだ。

主力陣地の警備から引きぬかれた増援部隊は２１人。

ここに詰めていた連中と合わせると、手持ちの人員は３１名に増え、ここに作業員達が加わり、陣地の総勢は６３名になる。

これでなんとか戦闘要員だけで小隊レベルの戦力を手に入れることが出来た。

「筆頭鍛冶殿の仰るとおり、頼もしい限りですな」

俺の傍らに立つ曹長は、事実上の指揮官として彼らの命に責任を持たなければならない。

そのため、戦力が増えるという現象を素直に喜んでいる。

本来であれば、部下の数が増えれば責任も増え、その重圧に耐えるという苦行が発生する。

しかしながら、今までは必要最低限以下の人数しかおらず、責任を感じる前に生き残れるかどうかが問題だった。

そのうちに責任のほうが辛くなってくるだろうが、まあ、今からそれを気にした所で解決できるわけではない。
嫌なことがあったら二人で酒でも飲んで憂さ晴らしをするとしよう。

「それで筆頭鍛冶殿、昨日のお話なのですが？」

昨日の話、ああ、今後の編成の話だったな。
いきなりの増援だったために、取り敢えず二日がかりで待機場所を用意するのでバタバタしていたため、編成について話そうと言っただけになっていた。

「ああ、そういえばその話がまだでしたね。
ようするに、我々全員を一つの部隊として、その中で歩兵小隊、工兵小隊の二つに分けるわけです」

足元の地面に二つの枠を書く。
曹長は真剣な表情でそれを眺めている。
まあ、仕事の話なのだから真剣な方がいいのだが、そんなに表情を引き締めては疲れないのだろうか。

「全員で一度に動くことには無駄が多い、という方針でこの陣地を作ったわけですから、当然私達も同じようにしましょう。
工兵小隊の方は人数が必要な作業が多いですから例外として、歩兵小隊の方は１５人ずつの分隊、さらにそれを５人ずつに分けて班とします。
何かで動く必要があるときには原則として班単位で行動し、警備は二個班、敵襲の場合は最低でも一個分隊と、敵の規模に応じてこちらの動員数も増やすわけです」

こうしておけば、行動の無駄は最小限に抑えることができるだろう。
多重結界石のお陰で肉体的な疲労という面では毎回全員出動してもいいのだが、精神面を無視するとロクな事にならない。
「なるほど、確かにそうして所属を決めておけば、動かすときに楽ですな。
しかしそうなると、警備中に全体を見るのは私がやるわけですね？」
なんでそうなる。
それでは何のために部隊を細かく分けたのかわからなくなってしまうじゃないか。
「いやいや、班には班長、小隊には小隊長を置き、その上に私と貴方で本部を作ったほうが効率がいいでしょう？
自分たちの持ち場の範囲で誰をどこに置くのか程度の話は班長、一日の警備をどうするのかは小隊長、敵襲や避難民発見などの話は本部へとしておけば十分のはずです。
最初はいいかもしれませんが、毎日のように怪しい水音だの人影のようなものだので呼び出されていたのでは、いくらやる気があっても耐えられないですよ」
軽歩兵と工兵しかいない増強小隊ではあるが、それでも６０人を超える人間がいるのだ。
人員配置と権限分担は早い段階で決めておき、管理上の手間を最小限に抑えておかなければならない。
「そうなりますと、私の仕事は随分と減ってしまうようなのですが？」

心配そうな表情を浮かべられてしまった。
士官と下士官兵という区分が出来上がっていないこの世界では、指揮官先頭が基本となっている。

「当分の間は、私の後ろをついて歩いてもらいます。
心配しなくとも、敵が来れば嫌でも働いてもらいますよ」

そう、敵が来れば指揮官先頭しか無いのだ。
彼のためにもそれなりの装備を用意してやらなければならないな。

「各小隊長と班長を決めるのはお任せします。
全員が納得するのは難しいかもしれませんが、なるべく円満に済むようにしてください。
私は工兵小隊の方に用事があるので、今日中に何とかしておいてくれればそれで構いません」

こちらで年齢とか軍歴を元に決めた方が早いのだが、何でアイツがという話に絶対になるはずだ。
それならば自分たちで決めさせてしまったほうが、後で能力が問題になったときに文句を言いやすくて助かる。

「話はわかったんだけどよ、アンタに雇われるってのなら、こいつらも納得するんだがね。
そうじゃないって言うんなら、悪いが今回限りにさせてもらいたい」

俺の提案を聞いたレルゴという名前の代表者は、後ろの大工たちを肩越しに見やりつつそう回答した。

曹長と別れた後に訪れた工兵小隊の方では、話はすんなりとは決まってくれなかった。
彼らは街の大工の集まりだったのだが、元々この陣地が完成するまでという条件で臨時に雇われた存在だった。
とはいえ、人口の極端な増減があるわけでもないこの地域では、彼らの仕事は驚くほどに少ない。
ある程度の身分と定期的な給料が望める領主軍への所属は受け入れてもらえると思っていたのだが、そううまくはいかないようだ。
「私に雇われるのでは不安で、領主様に仕える事には納得というのならばわかるのですが、どうしてそうなったのですか？」
求めてくる所がどうも見えてこない。
彼らに対する給料の提示は領主軍兵士に準じたものだし、それ以上を求めるのであればこんな言い方はしないだろう。
「簡単な話だ。
アンタはどういうわけだか大工の仕事ってのを理解してくれているからこっちもやりやすい。
だが、領主軍の一人となっちまったら最後、行けといわれれば一人でどこかに連れてかれるかもしれんだろう？」
なるほど、そういうわけか。
身分の保証以前の話で、業務内容に理解があり、それに基づいて命令をしてくれる上司の元でしか働きたくないという事か。
技能職である大工という彼らの仕事から考えれば、仕方のない話だな。
体力がある兵士を何人かつけるので、お前一人で陣地を作れと言われても出来るはずがない。
そういう訓練を積んでいる現代の軍隊ならば話は別なのだが、こ

の世界ではそういうわけにもいかないだろう。

「仰りたいことはわかりました。
そういう事であれば、まずは私に雇われてください。
当然ですが、別の場所で仕事をお願いすることになったとしても、最低限の人数がまとまった状態でしか引き受けません」

逆に言えば、私兵として使うのであれば、常に俺の都合のいい仕事だけをしてもらうこともできるだろう。
そう考えれば悪い話でもない。
金の問題については、筆頭鍛冶になるときに人事権を与えられている以上、何とかなるだろう。
ならなかったら蓄えを切り崩せばいいだけだ。

「話が早くて助かるな。
それじゃあよろしく頼むぜ、筆頭鍛冶殿」

この条件で断られることはないだろうと踏んで言ってみたが、予想通り素直に受け入れてもらえた。
部下として今後も使えるのであれば、彼らのスキルも上げるために時間を割く価値があるな。
今後の教育計画を考えておかねばなるまい。

「じゃあそういうわけですので、貴方に小隊長を努めてもらいます。
今までの仕事を見ていた感じでは誰がどう指示を出すのかは決まっているようですので、そこから先のことはお任せしますよ」

5人じゃなくて7人単位じゃないと仕事ができないとか、そういうこともあるだろう。
中身は任せるので、形だけはこの組織にあわせてくれればそれで

いい。

「おうよ、誰がどうなったかだけは後で報告すればいいんだよな？
そこら辺は、ティル！」

名前を呼ばれたらしい若者が慌ててこちらへ駆けてくる。
随分と小柄だが、あれで仕事が出来るのかね。

「はい！何でしょうか親方！」

うんうん、元気の良い若者ってのはいつ見ても気持ちがいいものだ。
それはいいのだが、小柄だと思っていたら女性じゃないか。
失礼な物言いだが、彼女に力仕事が務まるのか？

「俺達からの報告はコイツにやってもらう。
ティル、筆頭鍛冶殿にご挨拶しろ」

よく見れば日に焼けているが綺麗な顔立ちじゃないか。
別に俺は熱心な男女差別主義者というわけではないが、彼女のような人物が危険な最前線勤務というのは好きじゃないな。
まあ、事前に調べずに雇った人間が言っていいことではないが。

「はいっ！あの、筆頭鍛冶殿、初めまして。
私はティルといいます。父がいつもお世話になっております」

そんなに緊張しないで欲しいものなのだが、まあ仕方が無いか。
仮にも俺は筆頭鍛冶。
領主様に比べれば天と地ほどの差があるとはいえ、それでも一般市民から見れば雲上とまでは行かなくとも山の頂に近いレベルの身

分の差はある。

「よろしくお願いします。
お父さまというのは、レルゴさんの事ですよね？」

こんな真っ赤な髪の毛の人間がそこいらにいてもらっては困るのだが、まあ青に紫にと多彩な髪の色があるからな。
目にしていないだけで兵士の方に父親がいるのかもしれん。

「妻に似てな、俺の娘とは思えんほど器量がいいだろう？」

そういう同意しづらいことを尋ねるのは止めて欲しいものだ。

「目元はレルゴさん譲りのようですな」

よく聞く言い回しで逃げつつ、工兵小隊の編成も無事に完了した。
それに気を良くした俺は、早速この陣地にも簡単な炉を作るように依頼したのだが、嫌な顔どころか笑顔を浮かべた彼らは早速仕事に取り掛かってくれた。
仕事の早い人間というのはいつ見ても素敵なものだ。

第十二話（前書き）

２０１１年１２月２３日
感想にてご指摘頂いた誤字を修正しました。

第十二話

４９日目　昼　ジラコスタ連合王国　国境付近の川　警戒陣地

「目標！前方敵集団！撃ち方はじめ！」

俺の号令に従い、兵士たちは一斉に矢を放った。

その数１５、小隊の半数である。

大半は地面を耕しているだけだが、それでも何本かは目標に突き刺さった。

しかし、この世界に機関銃や重砲がない以上、陣前滅滅、つまり陣地に敵を触れさせることなく防御を行うことはできない。

必然的に、防御戦闘は次の段階へと移行する。

「敵接近！槍兵構え！叩けぇ！」

遠距離攻撃の出来る弓兵の次は、比較的中距離の攻撃ができる槍兵の出番だ。

彼らには２ｍ以上の竹製の槍を装備させている。

槍兵たちは命令に忠実に従い、自分たちの持つ槍をできる限りの勢いで振り下ろす。

それらは防御柵に殺到した目標の頭を叩き、あるものは腹を切り裂き、別のものは腹を突き刺しているであろう場所に槍先を向ける。

「進入路に敵接近、総員抜剣、逆襲にぃー移れぇ！」

剣を抜いた俺を先頭に、待機していた最後の兵士たちが一斉に飛び出す。

俺たちは唯一用意された進入路に迫ろうとしていた目標たちに次

々に殺到し、剣撃を加えていく。
数に限りがあったというのもあるが、目標たちは全てが致命傷を受けたと直ぐに判定される。
「よーし！敵は全滅した！訓練終わり！」
俺の言葉を最後に、最初の演習は完了した。
少ない兵力をさらに3つの兵科に分けるという提案は当初こそ難色を示されたが、座学と演習を通じて今では全員の常識になっている。
敵を近寄らせないほどの弾幕を張れる戦力はないし、敵を陣内に入れないための防壁があるわけでもない。
かといってこちらから打って出れば勝てるという保障もない。
ないない尽くしの状況で警戒陣地としての任を果たそうというのであれば、少しでも時間を稼げる組織を作り上げ、報告を受けた本隊が体制を整えられるようにするしかないのだ。
「たいしたもんじゃないか」
この日、視察に来ていたエルドナ兵士隊長は、眼前で繰り広げられた光景に満足そうに頷いていた。
それを横目に見つつ、俺は自分の想像が合っていたことに顔を青ざめさせている。
想像というのはつまりこうだ。
この世界は、ゲームに良く似た異世界ではなく、ゲームの内容がそのまま異世界になっている。
だから鋼のバルニアは今までこなせていたはずの激務で突然過労死し、兵士たちは装備の手入れすらできない。
街にマトモな鍛冶屋が一軒しかないという状況もそれだ。
そして、剣を振るうか矢を射るか、それ以外は素人同然の軍人た

ち。
本陣地の目的は、本隊に行動の自由を与えるための時間稼ぎにある。
我々は敵の接近と規模を確認し、それを本隊に伝え、機動防御を行う騎馬隊を最大限有効活用することによって最終的な勝利を得る。
そんな素人丸出しの提案をした時、隣の兵士隊長は驚愕したかのように目を見開き、お世辞には見えない賞賛の言葉で提案を受け入れた。

「恐れ入ります。
ところで、ドワーフの皆様、ああ、ルニティア地下王国からの増援はまだ到着されていないのですか？」

ドワーフが来ればおおっぴらに小銃が使えるようになる。
小銃が使えれば、弓兵は全て銃兵に変え、銃剣を付けてやれば槍兵としても使える様になる。
そうすれば陣地防御はかなり楽になるし、一人でも雇うことが出来れば、戦後を見据えて領地発展の準備も出来る。
現時点でもやりすぎは変わらないのだが、全く新しい武器を使う場合には、さすがに最初だけは誰かに教わるというステップを踏まないとな。

「いや、あの国も諸王連合には入っているので来ることは来るんだろうが、今のところ話は聞いていないな。
エルフの出方を伺っているんじゃないか？」

は？エルフ？
何で同じ諸王連合でお互いの出方を伺わないといけないんだ？

「なんだ、お前知らないのか？

エルフとドワーフは仲が悪いんだ。
いや、悪いと言うか、どちらが上かを競っているという表現のほうが正しいかな」

そんな事を人命が関わる時にやらないでくれよ。
エルドナ曰く、ちょっとした式典でも小規模な演習でも、エルフとドワーフは常にどれだけ自分たちのほうが勢力を持っているかを示そうと全力らしい。
エルフが１００金貨投入するならドワーフは５００金貨。
ドワーフが１０００人動員するならエルフは２０００人と、まあ手を抜かれるよりは力を入れてくれる方がありがたいが、そのような有様のようだ。

「しかし、エルフですか。
どうせ競うならば、まずはどれだけ素早く援軍を送り込めるかを重点にして、種族としての有能さを競って欲しかったものですね」

思わず溜息が漏れる。
今はとにかく頭数が必要な時期だ。
偵察を密に行い、防衛線をとにかく整え、常備軍の総動員で済むのか、子供から老人までを残らず叩きこむレベルなのかを調べなければならないのに。

「その案いっただきぃ！」

いきなり掛けられた声に俺とエルドナは慌てて森の方を見た。
そこにいたのは、いや、どこにいるんだ？

「盗み聞きとは感心しませんね。
誇り高い種族としての自覚にかけているのではありませんか？」

どこを見ているとも分からないような遠い目線で叱責する。
一箇所に目線をやって全然違う場所から出てきたら赤っ恥もいいところだからな。
エルフか、ドワーフか、あるいは魔族か人類の援軍か。
誰だか分からないので、ここは一つ無難な表現に留めておこう。

「失礼致しました。
エルフ精霊レンジャー部隊のシルフィーヌです。
諸王連合からの要請に従い、連絡員として着任致しました。
ああ、ここにハンコかサインをお願いします」

俺の目の前の草薮から突然現れたそのエルフは、どこに出しても恥ずかしくない軍人のような口調で名乗ったかと思うと、宅配員のような台詞で書類を出してきた。
脱力する瞬間ではあるが、まあ、この世界はそんなものだろうと割りきってサインする。
それにしても、金髪で長髪かつ美形巨乳とか、男の妄想を絵にしたような人物だな。
おまけにレンジャー？
やはり返事は常にレンジャーなのだろうか。
馬鹿な事を思いつつ書類を返す。

「今来ている戦力はどれくらいですか？」

彼氏や許嫁や配偶者の有無も気になるところだが、まずは戦争だ。
ああ、なんで異世界まで来てこんな真面目に仕事をしなければならないのだ。

「現在のところは私を含めて１５人。

全員がレンジャーの資格を持っています。
弓兵としても人間以上に戦えます」
淀みなくそう答えると、彼女は俺の目をじっと見てきた。
おいおい、照れるじゃないか。
自慢じゃないが、俺は女性に免疫はないぞ。
「１０人を偵察、残りは弓兵としてこちらの兵士たちの指導をお願いします。
貴方は申し訳ありませんが直ちに連絡のためにエルフ領に戻って族長たちに説明して下さい。
ああ、何を頼みたいかはご存知ですよね？」
顔面が赤くなるのを感じつつ、もっと増援を連れてきてくれと要請する。
最低でも戦闘要員で一個中隊は欲しい。
敵は奇襲とはいえ一国を落とす存在だ。
人肉警報装置の指揮官として、手持ちの戦力があればあるほど行動の自由を得られるというのは言うまでもない。
「確かに承りました。
シルフィーヌ・リュンティディルア。
祖先の名に誓って、必ずや任務を果たします」
よく分からないが、ヤル気になってくれたのはいい話だ。
彼女の成果に期待するとしよう。
「貴方が戻るまで、全員の指揮権をお借りしてもよろしいですか？」
最後になったが重要な事を確認しておく。

いざ敵襲となってから「人間の命令は受けない」だの「上司に指示を仰ぎませんと」などと言われては困る。

「構いません。
ですが、できるだけ生き残れるようにしてやってください」

さすがに先遣隊として派遣されてくるだけはあるようだ。
シルフィーヌは俺の要望に一瞬の迷いもなく同意してくれた。

「ありがとうございます。
できるだけ無理はさせないようにしますよ」

俺の言葉に彼女は嬉しそうに頷き、それではと告げると瞬きする間に森の中へと消えていった。
動きが早くて助かる。
これでもう一個分隊は作る事ができる。
うん、素晴らしいじゃないか。

精霊歴９４５６年　緑精霊王の月４１日　昼　ジラコスタ連合王国
前線

私の名前はシルフィーヌ・リュンティディルア。
エルフ首長家に連なる家の者だ。
胸が大きすぎたために弓兵としての適正には欠けているが、母なる森林を駆けるレンジャーとしての能力は誰にも負けないと自負している。
そんな私達が最前線に来ているのには当然理由があった。
今まで通りだったはずなのに突然苦しくなった一族の食糧事情。

それを輸入という形であってもいいから解決するために、軍事面での貢献という選択肢を一族が選んだからである。

「これは一体？」

連合王国軍の歩兵たちが陣を張っている場所へ到着した私たちは、奇妙な光景を目にした。

私の知る人間の歩兵というのは、もっとこう、なんと言うか、剣を振るって敵を倒すという感じだった。

だが、今目の前にいる人々は違う。

確かに剣はある。

だが、彼らが重視しているのは明らかに弓矢であり、槍である。

「リュンティディルア様。

我々は周囲の見張りに付きます。

何かあればお呼び下さい」

レンジャー部隊が直ちに散っていく。

彼女たちは森と一体化している。

エルフの中でも特に優れた能力を持つ彼女たちが見張りをする以上、この陣はもう奇襲を受ける事は絶対にありえないだろう。

「筆頭鍛冶とやらは誰かしら？」

忙しげに兵士たちが行き来する陣を眺める。

彼らは見ていて気持ちが良いほどにテキパキと活動している。

あちらで柵が立てられ、こちらでは新たなテントが建てられていく。

この陣が作られてからそれほど時間は経っていないと聞かされているが、随分とよく作られているようだ。

ナルガ王国とジラコスタ連合王国の国境はルミ大河で区切られている。
いくつも細かな支流に分かれているこの地域のみが、比較的簡単にまとまった人数を舟を使わずに渡す事が出来る。
私は生まれつきの将軍というわけではないが、さすがにこの地の重要性は理解できる。
そこに配置される兵士なのだから、精鋭でないはずがない。
だが、僧侶も魔術師も騎士もいない。
もし大群が押し寄せたり怪我人が出たらどうするのだろうか？

「わからないわね、あの二人のどちらかかしら？」

誰もが忙しなく動き回る中、何か難しそうな会話をしている二人を見つけた。
見るからに高価な物を身につけているわけではないが、身に纏っている雰囲気が違う。
慎重に、しかしエルフだけが出来る軽やかさで森の中を進んで会話が聞こえる位置に接近する。

「いや、あの国も諸王連合には入っているので来ることは来るんだろうが、今のところ話は聞いていないな。
エルフの出方を伺っているんじゃないか？」

エルフの出方、ということは、恐らくはドワーフ達の話をしているのだろう。
本来であれば既にある程度の援軍を出発させていなければならない私達が、たった１５人でここにいる理由。

「なんだ、お前知らないのか？
エルフとドワーフは仲が悪いんだ。

いや、悪いと言うか、どちらが上かを競っているという表現のほうが正しいかな」

年上の方がそう言い放ち、それを聞かされた若い方が表情を歪める。

侮蔑。嘲笑。

そこまで悪意に満ちたものではないが、それに類するもの。

彼の心のなかを覗けば、恐らくはこう言っているのだろう。

『仲が良くて結構結構！死ぬまで両種族で遊んでいろ！』

明らかに劣勢な状況で、さらにその先頭に捨て駒のように配置されている彼らには、そう主張する権利がある。

私達が来ているのも、どちらかと言えば言い訳的に偵察だけは出しておこうというレベルのものだ。

ここに来るまでに見た遅れに遅れている人類の増援。

いつ出発できるかも分からない私達やドワーフたち。

きっと、ここにいる彼らは、増援が間に合うことなく全員死んでしまうのだろう。

若い方が全てを解決できる言葉を発したのは、その時だった。

「しかし、エルフですか。

どうせ競うならば、まずはどれだけ素早く援軍を送り込めるかを重点にして、種族としての有能さを競って欲しかったものですね」

なるほどね。

そういう物の考え方も出来るわけだ。

素早さを損ねない程度にできるだけ多くのエルフを送り込めば、それはエルフという種族の有能さの象徴になる。

あとからドワーフたちが大軍でやってきたとしても、最も苦しい

時期を支えたのは誰かという話になれば、彼らは絶対に私たちには勝てない。

「その案いっただきぃ！」

ああ、また地が出てしまった。

子供に見られるから注意しろといつも言われていたのに。

どうせ私はまだ４９ですよ！

第十三話【１２／２３　２１：１０全文修正】（前書き）

１２／２３　２１：１０修正
誤って次回投稿文を先に貼り付けてしまったため全文を差し替えました。

第十三話【12／23　21：10全文修正】

52日目　昼　ジラコスタ連合王国　国境付近の川　警戒陣地

「かなりマズイ状況ですね」

久々に訪れた主力陣地からの帰り道で、俺は深刻な表情を浮かべて曹長に相談をはじめた。

当然ながら、好きで部下の前でそのような表情をしているわけではない。

この日、俺は補給が滞り始めるという信じがたい問題を解決するために仕方なく後方へ抗議に赴いた。

そこで待っていたのは、勇者の出現という情報だった。

アルーシャ王国にある日突然訪れたらしい彼女は、偶然遭遇した盗賊を退治。

遅れて登場した騎士たちを従え、そのまま現地の腐った貴族を廃し、さらに突然現れた魔物まで打ち破ることによって勇者と呼ばれるようになったらしい。

そんな彼女が自分に心酔した騎士や兵士や改心した盗賊なんぞを引き連れて、先日主力陣地にやってきたそうだ。

ここまではまあ、いい話である。

「とりあえず、補給担当の奴が来たら楽しい最前線勤務を楽しんでもらうとしましょう」

歩兵でも弓兵でも騎兵でもない中途半端な戦力故に、勇者様ご一行は遊撃隊として好きなように行動することになったらしい。

それもまあ、いい話なのだ。

平時ならばともかく、今のような非常時に戦力としてカウントで

きない連中を貼り付けの守備隊として使用することは非常に危険であるからだ。
まあ、好きな様に暴れられたお陰で敵の大群を誘引してしまう危険性が無いというわけではないが、現状はそこまで慎重に行動すべきというわけでもない。

「彼がやってくるのが楽しみですね。
私としては、僅かな手勢で敵領土内の偵察とかをさせてみようと考えているのですが、筆頭鍛冶殿はどう思われますか？」

さすがは曹長。
いい考えを持っている。
個人的な利益をチラつかされたのか、単純に色香に惑わされたのか。
理由については尋問の結果を待つとして、補給担当者は我々への割り当て分を勝手に削り、その代わりに勇者様ご一行に物資を回してしまったそうなのだ。
どうやら確かに困っていたそうなのだが、そんな事は俺たちの知った事ではない。
我々が抗議に現れた瞬間の彼の顔色は凄いものだった。
俺は自慢ではないが仕事ができない男なので、まずは何とか担当者間で話を終わらせようと考えていた。
だが、彼の顔色は明らかに事情を把握し、問題が起こる可能性を認識しており、その解決策が思い浮かばない状態でなければできないものだった。
結果として、彼からは謝罪の言葉以外は引き出すことが出来ず、失望した俺は直ぐに上位者に話しを持っていった。
しかしながら、書類上の上位者に過ぎないエルドナ兵士隊長は、部下がそのような不始末を仕出かしているとも知らずに全体の補給計画について頭を抱えている最中だった。

彼には申し訳ないが俺は自分の部下たちを食わせる責任がある。
解決策が思いつかないので諦めるという選択肢はないのだ。
最終的に領主様まで駆けつけての大騒ぎとなった挙句、相手が勇者故に不問とはなったものの、補給担当者はしっかりと責任を取らされることで落とし所となったが、それで問題が全て消えたわけではない。
結局のところ無いものは無く、何をどうしても次の後方からの補給を待つ以外にはできないという結論になった。

「長距離偵察か、一度やらせてみたかったんですよ。
それにしても、まさか頭数だけ揃えてそれをどうやって維持するかを考えていなかったとは」

ひと通り騒ぎが収まった所で、諸王連合各国が派遣した精鋭であるはずの多国籍軍が、無くなる寸前の物資を必死にやりくりする姿を俺は確認した。
確かに、大軍を動員すれば兵站の難易度が増すのは当然のことである。
ましてや、この世界はゲームの世界がそのまま現実になったらしいために、様々な事柄が歪になっている。
とはいえである。
仮にも軍隊が、最前線に来てから物資不足で慌てるというのは無様にすぎるだろう。

「これから、我々はどうなるのでしょうか？」

曹長の表情は暗い。
自分たちの上がとんでもない無能だと思い知らされる事ほど恐ろしいことはない。
総兵力４９００名を数えることになった主力部隊は、戦わずして

崩壊寸前だったのだ。
派遣部隊はそれぞれの母国からも補給が出されているが、補給部隊自身も飯を食べ、水を飲み、時には戦闘を行なって消耗品を使っていく。
そのため、輸送する距離が伸びれば伸びるほど、運ぶ量が増加すれば増加するほど、最終的に手渡すことの出来る物資は減ってしまう。
今日聞いた話では、まず暫定的な処置として一部部隊を我が国と諸国を隔てる西のヴィト大河付近まで下げるしか無いというありさまだ。
警戒部隊が敵を発見し、機動防御によって敵を叩くという作戦は、一定量の戦闘能力を持つ主力部隊が存在していることを前提にしていた。
だが、これではそれ以前の段階だ。
まず、多国籍軍をきちんと受け入れることの出来る状況を構築し、兵站を一本化でも多重化でもいいのでとにかく機能するようにしなければならない。
そんな話をしたところで、誰もが喜んでさすがは筆頭鍛冶だと褒めてくるのが嫌になる。
彼らもこの異常事態の被害者であることは俺だけが知っている。
だが、そうだとしても、明らかに問題になることがわかっているにもかかわらず、問題が起こるまで誰もそれに気が付かないという事が恐ろしい。
人類が一丸となって戦争を遂行しようとしていることはありがたいが、この様子ではまた何か問題が発生するはずだ。
「筆頭鍛冶殿の防御計画ですが、根本から見直しが必要ではないかと思いますが、いかがなさいますか？」
黙って歩く俺に、曹長は不安そうな表情のまま尋ねてくる。

最前線に送り届ける分どころか、主力部隊が今日の夕飯に困るようなありさまである。
いざという時に速やかに撤退したとして、後を任すことの出来る主力がいないというのは悪夢だ。

「やりたくはなかったのですが、私の持つマジックアイテムや秘術を使うしかありませんね」

俺の言葉に曹長の表情が明るくなる。
彼らのような下士官兵は、上官がどれだけ手札を持っているかで全てが変わる。
そいつが無能であれば仲良く討ち死にしか選択肢がなく、出来る上官であれば生き残るという幸運を掴むことができる。
今のところ俺は失点がないどころか、彼らが生き残れると思えるだけの仕事ぶりを発揮することができていた。
それを帳消しにする上層部の不手際を聞かされた後で、それでも何とか出来ると言われれば、明るい表情の一つも出てくるだろう。

「他言は無用ですよ。
口の堅い兵士たちを四人用意して下さい。
食べ物と武器については、私が全部何とかしましょう」

俺にはインベントリがある。
そこには様々な食材や料理が保管されており、呼び出せば一瞬で手に入れることができる。
今までは買い物や補給なしで生活できると不信感を持たれるおそれがあるために使っていなかったが、この期に及んで出し惜しみはできない。
素材やら食料やら、長年のプレイで溜め込んだドロップ品や報奨品を配れば暫くはなんとかなるだろう。

さすがに馬鹿正直に配るわけには行かないので、主力陣地から補給として届けられたふりするが。
武器については、俺は忘れそうになるが鍛冶屋である。
グレードはさすがに考えなければならないが、生産に全力を注げばなんとでも出来る。

「それと、戦術も見直しましょう。
これをご存知ですか？」

俺はインベントリから一本の杖を取り出した。
そのまま無造作に曹長に手渡す。

「お借りしますが、今どこからそれを？
いや、失礼しました、って、これはマジックアイテムじゃないですか！」

何やら騒がしいが、曹長は手渡されたそれが何かを理解できるようだ。
さすがに、只の一兵卒ではないだけはあるな。

「そうです。私が自分でエンチャントした、ファイヤーロッドですよ。
これを弓兵以外の全員が装備したら、随分と戦闘が楽になりそうだと思いませんか？」

いわゆる魔法の杖は、魔法をエンチャントすることで戦闘補助道具にすることが出来る。
破壊されない限り半永久的に効果を発揮するものは作成難易度が高いが、使い捨てのものであれば量産も可能だ。
このファイヤーロッドは、その中でも特に難易度の低いものであ

る。
現在の俺の鍛冶レベルは最高の５０だが、魔法レベルは１２だ。
この手のアイテムを生産する場合、俺は魔法レベルに応じた威力のアイテムを作成することが出来る。
つまり、ファイヤーロッドを作るのであれば、魔法レベル１２相当の破壊力を持つ、１０連発のものが作成可能だ。
この１０発というのは最低数であり、ある方程式に従って発射弾数を増やすことも出来る。
まあ、方程式というほど複雑なものでもないが、それは以下のようなものだ。

（本来の魔法レベル－設定する魔法レベル）×１０＋１０

つまり、俺が魔法レベル１１相当の威力のファイヤーロッドを作成すれば、差分の１×１０＋１０ということで２０連発のものが作成できる。
生産職以外はまず使用することのない仕様だったのだが、部下たちに手渡すとなれば大きな効果が期待できる。
ただの歩兵が、使い捨ての効く大魔法使いに変身するのだ。

「筆頭鍛冶殿、そこまで私たちのことを考えていただけるのですね」

曹長は大変に感激している様子だが、俺は必要最低限以下の人数で主力陣地としての役割を求められそうな状況を何とかしようとしているだけだ。
質対量の戦いは、いつだって量に負ける側が不利である。
しかし、地形障害を最大限に活用している今の陣地であれば、戦闘正面を狭くすることを敵に強要できるあの場所であれば、敵の攻撃を受け止める際の負荷は致命的なものにはならないはずだ。

「弓兵とこれでできるだけ敵の先頭を叩き、相手の足を止めた所で森ごと焼き払う。
二回目以降は使えない手ですが、逆に言えば敵の初動を妨害することは出来るでしょう。
出来る限りの手を打って時間を稼ぎ、民間人と本隊、そしてもちろん我々が逃げ出す時間を作る」

森を焼いたぐらいで敵に打撃を与えることが出来るのかは何とも言えないが、これ以上は手が思いつかない。
最悪の場合、全員を退避させた後で俺が無双をすればささやかな時間稼ぎぐらいは出来るのだろうが、それだって気休めの範囲を出ない。

「これだけでも随分と変わります。
筆頭鍛冶殿、この杖は一本あたりどれくらいのお時間で作って頂けますか？
それと、一度使いきった後はどうなるのでしょうか？」

やはり彼は曹長だ。
実績に基づき上官を信頼し、そして部隊を生き残らせるために必要な全ての手立てを取ろうとする。

「一晩貰えれば十本はできますね。
回復は、多重結界石の近くに置いておけば、一時間といったところでしょうか、
ああそれと、今日からはこれを使って下さい」

インベントリから彼のために用意した指揮官用の装備品を次々と取り出す。
鋼鉄の剣、盾、兜、ガントレット、いずれもが銀細工を施し、持

久戦向けのエンチャントを施してある。
短い付き合いだが彼は信頼に値すると勝手に思っているので、いずれも＋5という大盤振る舞いだ。

「失礼ですが、今まで明らかに持っていなかったですよね？
難しいことは私にはよくわかりませんが、いえ、なんでもありません」

明らかに今までとは違う俺に何か言いたいことがあったようだが、それを飲み込むだけの度量はあるようだ。
そうでなくては大盤振る舞いをしてやった意味が無いので助かる。

「皆さんに犠牲を出さない範囲でしか、全力を振るうことは避けていました。
過ぎたる力は災いしか呼びません。
ですが、そうも言っていられないのが現状です」

人類の未来は暗い。
それどころか、俺たちの明日も見えない。
生半可な覚悟では、自分だけでも生き残ることはできないだろう。
まったく、こうも当初の目標からコロコロ変わるのでは格好悪いにもほどがあるな。
そんな事を思いつつ、俺は陣地に戻ると速やかに全員に対して新たな方針を説明した。
偶然とはいえ今まで失点なしで来た俺だけに、兵士たちは特に疑問もなく従ってくれた。
その過程で俺という存在に対してかなり誤解されたところもあったようだが、まあいいだろう。
大切なのは、生き残ることだ。

第十四話

６７日目　昼　ジラコスタ連合王国　国境付近の川　警戒陣地

「敵襲！基準点４に敵軍発見！とにかく多い！総数不明！」

川の向こうに配置された哨兵が警告の言葉を発し、仲間と共に素早く渡河を開始する。

基準点４とは兵士が歩いて三十分ほどの距離に置かれた標識だが、障害物を多数設置した渡河点を渡り切るにはおよそ十分はかかる。

敵の接近を知らせるという任務である以上、彼らはやるべき事を済ませている。

「敵襲！総数不明！総員戦闘配置！伝令準備せよ！」

天幕から兵士たちが飛び出し、予め定められた持ち場へと駆けていく。

総数不明とは、来たるべき時に備えて用意された言葉である。

明らかにどれだけいるのかわからない、ちょっとやそっとの工夫や奮闘ではどうしようもない規模の敵が来たときにだけ使われる表現だ。

「大規模な敵軍接近、抵抗不能、増援を直ちに要請する。

行け！」

伝令が弾かれたように主力陣地へ向けて駆けていく。

向こうでちゃんと見ているかどうかはわからないが狼煙も上げられる。

「集合」

普段とは明らかに異なる口調の筆頭鍛冶に、違和感を覚えつつも兵士たちは従う。

日頃の彼は、いつも穏やかな口調を絶やさない人間だった。

しかし、今は違う。

「全員揃っているか？」

そこにいたのはいつもの彼ではない。

どこに出しても恥ずかしくない軍人であり、更に言えば歴戦の古強者を感じさせる迫力があった。

「はい！筆頭鍛冶殿！」

ここ数日でようやく全員が馴染んだフル装備姿の曹長が答える。

「既に本隊への伝令は出発している。

まず間違いなく撤退許可が来るはずだが、命令が来るまでの間、我々は現在位置を維持し、敵に損害を与えなければならない」

彼の言葉に兵士たちの中からざわめきが漏れる。

敵軍の具体的な数はわからないが、哨兵の報告から自分たちではどうしようもないだけの数が押し寄せているということだけはわかる。

それを、別命あるまで交戦せよというのは、あまりにも酷い命令だ。

「このような大軍を前にして、生きるために逃げろと命じることができない立場を呪いたいところであるが、そうもいかん。

諸君らの中にはわかっている者もいると思うが、あえて命じよう。
生きるために戦え。
我々の後ろには混乱した本隊、そしてその後ろには大陸に住まうすべての人々がある」

筆頭鍛冶から掛けられた予想外の言葉に、兵士たちは静まり返った。
既に兵士たちの中では公然の秘密になっている無補給状態に近い本隊は、恐らくマトモな決戦を行うことはできない。
機動力が無い部隊を前に出し、残りは全力で撤退するの精一杯というところまで来ている。

「ここでの敗北は、まず間違いなく大陸東部の陥落に直結してしまう。
逃げようにも、逃げる場所はない。
ならばせめて、前を向いて死のうじゃないか」

戦えば死ぬ。
守ってくれるべき本隊は確実に役に立たない。
逃げてもいずれ蹂躙される。
そのような最悪の状況下では、前を向いて死ぬという選択肢は魅力的に見えた。
戦場であるにもかかわらず、彼らには子供の頃に聞いた英雄譚の伴奏が聞こえてきていた。
百の敵を一人で退けた騎士。
無数の化物を焼き尽くす魔導師。
地の利を生かし大軍を翻弄するレンジャー。
巨大な化物を自身ほどの長さがある大剣で屠る戦士。
一生語り継がれていく、男であれば必ず憧れる伝説の存在。
それに、自分たちが加わろうとしていると確かに感じるのだ。

「筆頭鍛冶殿に意見があるものはあるか？」
兵士たちの覚悟が決まっていく雰囲気を確認した曹長が尋ねる。
少しだけ待つが、誰も口を開かない。
彼は口の端に笑みを浮かべた。
「それでは、筆頭鍛冶殿と英雄譚を創りあげたい戦士は一歩前へ！」
今度は待つ必要はなかった。
目に戦意を滾らせた彼らは、力強く一歩を踏み出した。
「諸君らは全く大した戦士だ。
俺の部下として付き合ってくれる事を誇りに思う」
蒼白な顔面に何とかして笑みを浮かべた筆頭鍛冶は腰の剣を抜いた。
息を吸い込み、口を開く。
「総員戦闘配備！敵軍を撃滅する！」
彼にしては大変に珍しい、怒号に近い命令だった。
命令を受けた兵士たちは互いに大声で発破を掛けあいつつ、それぞれの持場へ向けて一斉に駆け出す。
「ありがとうございました」
兵士たちが駈け出していった後、俺は森の中から現れたエルフた

ちに頭を下げた。
彼女たちの手には、俺が用意したマジックアイテムが握られている。
戦士の戦太鼓、戦乙女のフルート、レンジャーの竪琴、魔導師の革笛。
混乱を抑え、戦意を高揚させるアイテム勢ぞろいである。
兵士たちの耳に途中から届いていた伴奏は、幻聴ではなく実際に奏でられていたものだ。
ついでに言えば、兵士たちの朝食は野菜と戦意高揚剤のスープだった。
そんな事までして戦闘に駆り立てるというのは人間のやることではないのだが、今は非常事態だ。
それに、これだけの手段を持ちいらなければ前線指揮官として大軍を受け止める指揮など出来るものか。
俺はこれでもまだ常識的な日本人としての部分が結構残っているんだ。

「状況が状況とはいえ、兵士たちが哀れだな」

居残り組のエルフの中で臨時指揮官を務めているルディアという女性がこちらを睨みつけてくるが、まあ気持ちはわかる。
俺がやっていることは特攻命令であり、事前に手を尽くして拒否できない状況を作り上げている。
だが、上官が仕方が無いと言ってはいけないのだが、今の状況は全てを許容する。

「もっと全体の戦争計画がきちんと練られていれば、私だってこんな殺人のような真似事はしませんでしたよ。
とはいえ、私がやったのは彼らの意思を誘導することであり、彼らが真に勇敢な心を持っていなければ、それでも逃げ出していたで

しょう。
私の部下たちを侮辱するような言動は謹んでいただきたい」
ゼロはどんな倍数を用意してもゼロにしかならない。
誘導があったとしても、兵士たちが前を向いてくれたのは彼らが郷土を守る兵士としての心を持っていてくれたからだ。
まあ、自己弁護なのだが。

「それで、私達にはどのような命令を？
死ぬまで戦えといわれれば逆らうことはできない立場だけれど、できれば一人ぐらいは逃がしてやってほしいものね」

随分と義理堅いことだ。
よくある愚かなニンゲンと誇り高いエルフという考えではなく、同じ大陸の住民と考えているからこその言葉なのだろう。

「この状況では物見の兵士だけで事足りるでしょう。
弓兵と共に敵を攻撃して下さい。
状況が本当に不味くなった時には、兵士たちもそうですが逃げて下さい」

抗戦が不可能になったときは、俺の死亡フラグが立つ時だ。
その時点での生存者を全員逃し、ありったけの手段を用いて敵に猛反撃を実施する。
生きるか死ぬかの瀬戸際になった時には、未来の不確定な危険性を憂いていても仕方が無いからな。

「その状況でも死ぬまで戦えと言われないのはありがたいが、先ほどとは言っていることが違うな。
前を向いて死ぬんじゃないのか？」

まだ若干の時間はあるが、今この時に難癖を付けられても困る。
「仲間がいる状態では使えない危険なマジックアイテムが幾つもあります。
後先を考えなくて良い状況になったら、それを片手に突撃しますよ」

俺の言葉にルディアは目を見開いた。
責任の取り方を知っていると思われたのだろうか。
まあ何でもいい。

「直ぐに敵が来ます。戦の準備をお願いします」

相手の答えを待たずに、俺はファイヤーロッド補充用の多重結界石を追加する作業へ向かった。
この程度の出し惜しみ無しは今の段階から始めてしまってもいいだろう。

第十五話

６７日目　昼　ジラコスタ連合王国　国境付近の川　警戒陣地

「敵の数が多すぎるようだが、それだけだ。
計画通り、槍兵および剣兵はまず遠距離攻撃で敵を削る。
交換用のものも用意してあるので、遠慮せずに撃ちまくれ」

その言葉と同時に休憩所の隣のテントが開けられ、中に詰まっているファイヤーロッドが全員に配布される。
始めた時に比べれば随分と戦力が増してはいるが、所詮は警戒陣地。
結局のところエルフの増援は間に合わず、主力陣地からあれ以上の増援もなかった。
そのような状況で、総数不明の敵をどうにかすることなど出来るはずもない。
しかしながら、そうであったとしても彼らは戦わなければならない。

「敵先鋒を確認！ゴブリンの大群です、すごい数です」

背の高い木に梯子をかけただけの監視所から報告が入る。
本来であれば彼の報告はもっと正確な表現をされなければならないのだが、この時押し寄せてきた魔王軍は総数が数百に達するという凄まじい物量を誇っていた。
街道を埋め尽くし、さらには彼らからは見えないが森の中一杯に広がっている。

「進入路を閉じろ！工兵隊は撤退！」

最前線を任される重兵士たちが予め用意されたバリケードを設置し、それを尻目に工兵たちは荷物をまとめて撤退の準備に入る。
彼らは名目上の兵士なだけであり、本格的な戦闘に耐えられるだけの訓練は行われていない。

「敵軍なおも接近中！ゴブリンの後ろは、ゾンビです！ナルガ王国軍の装備を身に付けている模様！」

悪い知らせは続く。
滅びたはずのナルガ王国軍の装備を装備した一団。
彼らが寝返ったのでなければ、それは魔の力で動く呪われた死体。
いわゆるゾンビのはずだ。

「続けて伝令を出す。
敵総数は数百以上。ゾンビもいると付け加えてくれ。
再度撤退許可を要請しろ」

状況は非常によろしくない。
せっかく作ったこの陣地であったが、想定では多くて百体程度の敵軍しか想定されていない。
敵の総数がそれを大幅に上回る以上、早い段階で名誉ある撤退を行わなければならないだろう。

「おいティル！何をしている！」

荷物をまとめた工兵達が撤退準備を進める中、小柄な人影が進入路を塞ぐバリケードへと向かっていく。
その手には木槌が握られている。
慌てて制止しようとする兵士たちをすり抜け、その人物はバリケ

ードに取り付く。

「置いたら固定してって言ったでしょ！？
私はいいから早く紐で縛って！」

駆けつけた兵士たちに彼女は鋭く怒鳴りつけ、固定がされていなかったバリケードの底板に杭を打ち始める。
怒鳴りつけられた兵士たちは、大慌てでロープで複数のバリケードを縛り付けて簡単には押し倒されないようにしていく。

「敵先鋒基準点２に到達！」

そのようなやり取りがされている間にも敵軍は進軍を続ける。
異様な陣地が置かれていたとしても、低級モンスターに過ぎないゴブリンたちはそれを脅威とは認識できないのだろう。
あるいは大群に属している故の高揚感から人類を必要以上に過小評価していたのかもしれない。
どちらにせよ、彼らは馬鹿正直に正面から陣地へ歩み寄るという信じがたい愚行の報いを直ぐに受けることとなった。

「弓兵、一斉撃ち方、放て！」

陣地内で命令が下され、十分な戦闘経験を積んでいる弓兵たちは、肩を並べるエルフたちと共に一斉射撃を実施した。
同時に放たれた矢の数は僅か４０本。
最前列を狙っているとはいえ、数百を超える敵に対して効果が望めるものではない。
しかし、それは必死になって次の矢を番えている弓兵達が考えることではなく、無表情で矢の行く先を眺めている筆頭鍛冶の仕事だ。

実際には、彼は現代の言葉で言うところの技術士官に相当し、戦闘指揮に携わるべき身分ではない。
だが、分業が行き届いた現代とは異なり、中世ヨーロッパ程度の世界観であるこの世界では、准貴族に相当する彼こそが指揮官でなければならない。
先頭にいた数体のゴブリンが、高速で飛来した矢の直撃を受けて地面へと倒れ伏す。
隊列に一瞬の隙間が開くが、続々と押し寄せる後続がそれを一瞬で埋めてしまう。
次々と矢が放たれ、敵が自由な身動きの取れない大群であることからそれらは驚異的な命中率を叩き出す。
しかしながら、大軍対寡兵の戦いというものは、多少の事では覆すことはできない。
次第に増えていく仲間の死骸を踏みつけながら、ゴブリンたちは進んでいく。

「休まず攻撃を続けろ、魔導兵撃ち方用意」

ただの兵士から魔導兵へとクラスチェンジを遂げた兵士たちの出番が訪れようとしていた。
彼らが持っているのはファイヤーロッド。
この世界の基準では破滅的と言っていい威力を持つ、レベル１０三十連発という強力な兵器である。

「魔導兵撃ち方準備完成！」
「回収班準備！撃ち終わったものは直ぐに休憩所へ運べ！」
「良く狙え！訓練の成果を見せる時だぞ！」
「報告！敵先鋒基準点１に到達！」

報告と命令が入り乱れ、そして遂に敵は待ち望んでいた射撃開始

ラインへと到達した。

６７日目　昼　ジラコスタ連合王国　国境付近の川　警戒陣地

川原に設けられた陣地を舞台にした攻防戦は、早くも沸点に達しようとしていた。
攻撃側の魔王軍は多少の損害は無視出来る物量を持っているのに対し、防御側は近距離に強い魔導兵を主戦力としている。
４０名からなる弓兵隊の防御射撃は、部隊規模からすれば決して小さくない戦果を挙げてはいたが、そもそもの戦力差が全てを台無しにしていた。

「敵先鋒は基準点１を通過！」

哨兵の報告に、曹長は筆頭鍛冶を見た。
自身も両手にファイヤーロッドを持っている彼は、曹長の視線に笑みで答えると口を開いた。

「魔導兵諸君！今こそ出番だぞ！
撃ち方用意！」

弓兵に比べると随分と命令が大雑把になってしまうのも無理は無い。
彼らは攻撃方法の訓練を積む時間はあったが、部隊行動を行うための経験を積み重ねる時間までは用意出来なかったのだ。
川原のために塹壕を掘るわけにもいかず、代わりに胸壁がわりに盛られた土壁に身を隠した魔導兵たちが杖を敵に向ける。
散発的な攻撃を受けている敵は進撃速度を全く落としておらず、

既にその最前列は対岸に到着していた。

「撃て！」

完結極まりない命令と共に、胸壁に取り付いていた全員が敵に向けて魔法発現キーワードを呟いた。

真昼だというのに目が眩むような閃光が発生する。

十数名が一度にレベル１０のファイヤーボールを連射したのだから無理もない。

放たれた魔法の矢は、そのまま直進して渡河を開始しようとしていたモンスターたちに飛び込む。

直撃を受けたものはそのまま即死したらしく後ろへと撃ち倒され、さらに破裂した火炎によって周囲のゴブリンたちが炎上する。

幾つかの魔法は狙いをはずし、対岸の障害物や左右に広がる森の中へ命中するが、現状ではそれすらも有効打となった。

燃え盛るバリケードは誰も近寄りたくないものとなり、強烈な火炎魔法故に木々は青々とした葉を付けたまま猛烈に燃え上がる。

「Ｇｙａａａａａａａａａａａａａａ！！！！」

人間では何と言っているか理解できないが、悲鳴であることだけはわかる絶叫の合唱が開始された。

レジストなど出来るはずもない強烈な火炎魔法の集中砲撃を受けた先頭集団は、走りまわる松明となっている。

全身に強烈な熱傷を負い、救護など期待できるはずもない彼らはそれほど長くは苦しまずに済むだろう。

「こいつは、すげえ」

最初の一撃を放った後、魔導兵たちは自分たち生み出した地獄に

呆然としていた。
確かに訓練の時にもその凄まじさは十分に体験したつもりであったが、あの魔王軍相手にこれほどの効果があるとは。

「何をしているか！」

生命体を焼き尽くす炎に見入る彼らであったが、筆頭鍛冶は苛立ったような叫びで叱咤した。
両手のファイヤーロッドから次々と火炎弾を撃ち出す彼は、多少の外れは許容範囲だと言わんばかりの弾幕をはっていた。
ゴブリンが、ゾンビが、地面が、木々が、バリケードが、彼の攻撃が行われるたびに燃え上がり、対岸の絶叫が増える。

「前はどこもかしこも敵だらけだぞ！ここで休んでどうする！撃ちまくれ！」

そこまで叫び、どうやら撃ち尽くしたらしい杖を捨てる。
足元に積み重ねてある新品を手に取ると、再び彼は弾幕を再開した。

「ひ、筆頭鍛冶殿に遅れをとるな！撃て！撃て！」

伍長たちが自分の分隊員に引き攣った声で命令を下し、兵士たちは慌てて防御射撃を再開した。
この瞬間、圧倒的劣勢のはずの守備隊は、間違いなく敵軍を圧倒していた。
先頭集団が燃え上がるバリケードと化した魔王軍は足を止められた。
さらに外れ弾が燃え上がらせた左右の森が、いよいよ無視できない勢いの森林火災となり始めたのだ。

「左！騎士の集団が突撃体制！攻撃を集中させろ！」

筆頭鍛冶の言葉に左翼の分隊が視線を向けると、ナルガ王家の紋章を施された盾を構えたゾンビ騎士の集団が足早に接近してくる。

この場を守る兵士たちが弓兵であれば、此処から先は絶望的な白兵戦となっただろう。

だが、彼らが手に持っているのは弓でもなければ剣でもなかった。

「撃て！撃て！ぶっ殺せ！」

伍長が的確な命令を行い、兵士たちは手に持った杖を敵に向けた。

射撃が集中される。

鉄だろうがそれ以上のものであろうが、魔法に対する防御力のない盾は無力である。

放たれた火炎弾の直撃を受けたゾンビ騎士たちは、着弾の衝撃でなぎ倒され、続いて押し寄せた第二射で強制的な火葬が行われる。

「ほ、報告！敵後方よりゴーレム！ゴーレムの集団接近！！」

危なげ無く防御戦闘が進められていく中、木の上から敵の様子を監視していた哨兵から叫びが上がる。

未だに止まること無く進む敵軍。

その隊列の中に、頭ひとつどころか周囲から倍以上の高さを持つ何かが接近してくる。

「ゴーレムだって！？」

たった今ゾンビ騎士団を殲滅して誇らしげにしていた分隊から悲鳴が上がる。

彼らの持つファイヤーロッドは、確かに通常の敵相手には致命的な破壊力を発揮できる。
だが、土や岩、鉄といった物質で構成され、さらには魔法生命体であるがゆえに頑丈なゴーレムは、有効打を与えることが困難だ。

「種類はなんだ！？鉄か？石か？色で見分けろ！」

全員の戦意が一瞬で萎む中、筆頭鍛冶は恐怖を含まない単なる大声で敵の種類を尋ねた。
あの上官であれば、また何とかしてくれるかもしれない。
そのやり取りに全員が集中する。

「い、ろ？
ええと、色は、しばらくお待ちください！」

予想外の返しであったためか哨兵からの応答が遅れる。
それを待ちつつ、兵士たちは防御射撃を続ける。
敵の足が多少止まったとしても攻撃できるよう、基準点1はファイヤーロッドの有効射程にかなりの余裕を持たせて設定されていた。
燃え上がる味方の死体を避けるようにして接近する敵軍は、未だに一方的に撃たれ続けていた。

「報告します！ゴーレムの色は土色！土色です！」

その報告に再び兵士たちは落ち込む。
土色という事は、恐らくはサンドゴーレム。
やはりファイヤーロッドでは効果は望めない。

「そうか！全員傾注！」

だが、報告を受けた筆頭鍛冶の声音は変わらなかった。
いや、むしろ若干ながら得意げに聞こえなくもない。
「黙っていてすまないが、実は、マジックアイテムはこれだけではないんだ」
彼の外套から何本もの杖が転がり出る。
「命令！各分隊にウォーターロッドを五本ずつ配布する！
敵が接近したらぶちかましてやれ！」
彼の言葉に、全員の戦意は底辺から頂点までいきなり急上昇した。
彼らの上官は、常識から随分と外れた存在らしい。
しかしながら、圧倒的敵軍に攻め寄せられている現状では、これほど嬉しいことはない。
「伝令！伝令！本隊より緊急連絡！」
ようやく戻ってきた伝令が現れたのは、新装備を受領しようと兵士たちが筆頭鍛冶に駆け寄った瞬間であった。
馬を駆り、それほど長距離を移動したわけではないというにも関わらず、彼の表情は苦しそうに歪んでいる。
「ご苦労、報告してくれ」
その表情だけで良くない何かを既に受け取った筆頭鍛冶は、表情を変えずに尋ねた。
「報告します！本隊はこれ以上の抗戦継続を断念。直ちにアルナミアに向け撤退を開始。

我々にも直ぐに続行するようにとのことであります！」

待ち望んでいたはずの撤退許可ではあったが、その内容は想定の範囲外の規模だった。

第十六話

６７日目　夕刻　ジラコスタ連合王国　アルナミア街道

「皆さん！とにかく足を止めないでください！
止まればもう動けませんよ！」

長い敗残兵の列が続いていた。
敵の攻撃は、当たり前といえばそうだが、他の地点でも行われていた。
さすがに彼らも完全に無能というわけではなく、主力陣地を囲うようにして警戒陣地を張り巡らせていたらしい。
だが、対する魔王軍も負けてはおらず、同時多発的に奇襲をかけてきたようなのだ。
俺は相当に運が良かったらしく、逃げ延びてきた連中から話を聞くと、いきなり飛来したドラゴンに襲撃されたり、森の中から出現したフォレストウルフの大群に食い荒らされた部隊もいたそうだ。
そんなわけで、俺のいた陣地のように持ちこたえた部隊もいたが、全体の結果としては全軍潰走をする羽目になった。
失地が増えるのは痛いが、主力部隊を可能なかぎり生存させる方を取ることにしたようだな。
まさかとは思うが、勇者様に全てを任せて全軍で防御とかいう頭の悪い計画じゃないだろうな。
いつどころか本当にできるかどうかも分からない人任せのプランなどさすがに選ばないとは思いたい。
だが、ついこの間に補給計画無しで大軍を動員するという華麗な戦争指揮を見せてくれただけに、不安は尽きない。
とはいえ、単なる筆頭鍛冶にすぎない俺には打てる手など無いのだが。

「おい！前が詰まってるんだよ！早くどかせ！」
前を進む別の部隊から苛立ちを隠さない怒号があげられる。
見れば、馬が疲れ果てたために立ち往生している馬車がいるらしい。
幌も何も無いところを見ると、輸送部隊のもののようだ。
「曹長、何人かと一緒に後ろからついてきて下さい」
俺の大好物である困った事態が発生したようだな。
まったく、俺は偉そうな役職は付いているが鍛冶屋なんだぞ。
どうしてこんな楽しい楽しい敗残兵の指揮官なんていう仕事をしなけりゃならんのだ。
「私はレーア・アルレラ＝アリール辺境伯が筆頭鍛冶のヤマダです。これは何の騒ぎですか？」
言われるまでもなく事情は把握できているが、質問するのも礼儀というものだろう。
「こっ、これは煉獄の魔術師様！」
なんだそれは。
俺の詰問を受けた年配の兵士は、聞きなれない呼び方をしつつ怯えたようにこちらを見てきた。
「私は筆頭鍛冶です。お間違い無きようお願いします。
それでこれは？」

道のど真ん中で馬車が立ち往生しているため、俺たちより後ろは完全に足が止まってしまっている。
ああ、この強制的な小休止でまた何人も脱落してしまうんだろうな。
こういう潰走の時に足を止めてしまうと、兵士からただの怯えた人になってしまうらしいんだよな。

「は、はい。
実はこの荷物運びが馬が疲れたなどと言い訳をしまして道を開けないのです。
直ぐに我々でなんとかしますので、筆頭鍛冶様はどうぞ先にお進み下さい」

そりゃあまあ、俺は准貴族なのだから気を使ってくれるのは嬉しいんだが。
馬は既に泡を吹いているし、御者は悲痛な表情で短剣を抜いたし、ああもう、どうとでもなれ。

「なるほど、それは大変ですね。
しかしながら、馬も貴重な辺境伯家の財産です。
申し訳ありませんが、今回は私の顔を立ててください」

それだけ言い放つと俺は御者の隣へと歩み寄る。

「それはやめておきましょうか。馬も戦友ですよね？」

短剣を持つ手にそっと触れ、もう一方の手を馬へと向ける。

「んーと、こういう場合は“リカバリー”と“アップ・ストレング

ス”でいいかな」

俺の手が輝き、先ほどまで瀕死だった馬は見る見るうちに覇気溢れる姿へと変わった。

いやまあ、荷駄馬なので別にそれほど威風堂々というわけではないが。

「俺の言っていることがわかるな？これ食っとけ」

テイマー目指して動物語とか学んでいたことがこんな形で役に立つとは思わなかったな。

とにかく俺の差し出した丸薬を、馬は躊躇すること無く平らげた。

「これでアルナミアまでは持つはずです。

行って良し！」

明らかに異常な一連の流れに、御者は唖然とこちらを見ているだけだった。

せめてもの情けで楽にしてやるしか無いと覚悟していた愛馬が、話に聞く神殿の回復魔法で元気になる。

さらに何事か囁いただけで、筆頭鍛冶が差し出した丸薬を当然のように口にしたのだ。

まあ、唖然としてしまうのも無理は無いのか。

「あの、筆頭鍛冶様、これは？」

どうにも気になるらしく素直に立ち去ってくれないな。

「怪しげな術を収めていますと、動物に自分の言葉を聴かせる必要がある時もあります。

ああ、さっき食べさせたのは一日だけ疲労を回復できる秘薬です。
高いものですが、お金は結構ですので、先へ進んでください」

それだけを伝え、返事を待たずに俺は立ち去る。
後は曹長が丸くまとめて敗走を再開させてくれるだろう。
まったく、どうしてこんな面倒なことをしなければならないのか。

「報告します。前方に妙な部隊を発見しました」

隊列の左右に出している斥候が駆け寄ってくるなり報告する。
自分の隊列に戻ったと思ったらこれだ。
今度は何だよ。

「妙な部隊というのは何ですか？」

視線を向けると、あの時に木に登って報告をしてくれていた兵士じゃないか。
無事に撤退ができてよかったな。

「人数は５０人ほどなのですが、数騎の騎士がおり、どうやら街道を防御しようとしているようです。
陣地と呼べるほど立派なものはありませんでしたが、明らかにここに留まろうとしています」

督戦隊付きの遅滞防御部隊かな。
囚人兵か、あるいは脱走兵の寄せ集めか。
とにかくそういうのであれば気にしないで通りすぎることが出来るんだが、さてどうなるかな。

６７日目　夕刻　ジラコスタ連合王国　アルナミア街道　遅滞防御部隊の陣地

「そこ！止まれ！」

なるほど、絵に描いたような捨て駒だな。

疲れきった様子の遅滞防御部隊を眺めていた俺に、このところでは珍しい高圧的な言葉が浴びせられた。

「私の部隊が何か？」

声の方を向くと、神聖騎兵といべきなのか騎乗して着飾った連中がこちら見ていた。

「貴様ら、戦わずに逃げ出してきたな！

この聖戦においてそのような惰弱が許されるとでも思っているのか！？」

いきなり随分な言い草だな。

三人とも馬ごと焼き尽くしてやろうか。

「大変失礼ですが、どちらさまでしょうか？

私はレーア・アルレラ＝アリール辺境伯が筆頭鍛冶のヤマダです。

我々は防衛戦闘中に撤退命令を受け、アルナミアへ移動する最中です。

申し訳ありませんが、御用がなければ直ぐに移動を再開したいのですが」

無駄と知りつつも抗弁する。

確かに俺の部隊には損害といえるようなものはないが、だからと言っていきなり脱走兵扱いかよ。
いや、違うだろう。
察するに彼らは督戦隊なのだろう。
敵軍の足をとめるために、ここで少しでも兵士をかき集めようとしているのだ。

「馬鹿馬鹿しい。
嘘を付くのであればもっと考えて言うのだな！
どこの世界に兵隊と一緒にこんな後方をうろつく筆頭鍛冶がいるというのだ。
とにかく、貴様らは全員我が栄光ある神聖騎士団挺身隊に入ってもらうぞ」

残念だが、向こうの言うとおりだな。
筆頭鍛冶という役職名で部隊指揮官をやっているのは俺くらいのものだろう。

「そこまで言うのであれば、まあそういう事で構いませんが、あとで後悔しないでくださいよ。
伝令！」

この場でこれ以上抗弁を試みた所で効果はないだろう。
迎えを出してもらうために伝令を呼ぶ。

「エルドナ兵士隊長かウェル騎士団長か、とにかく誰でもいいので偉い人を呼んできてください。
このままでは筆頭鍛冶が死んでしまうと付け加えていただけるとなおありがたいですね」

俺が困難な命令を伝えると、伝令は狼狽えたように神聖騎士様と俺に視線を交互に向ける。
まあ、伝令とはいえ現状で自由にこの場を離れられるとは確かに思わないだろう。

「ああ、証拠がわりにこの剣を渡しましょう」

俺は腰から吊るしていた鉄の剣＋１０を渡した。
どう考えても俺以外には作り出すことのできない伝説級の一品だ。
こんなものを伝令に渡して嘘を付くような暇人がいる筈が無いので、きっと分かってくれるだろう。

「さあ、行きなさい！」

最後の部分に力を込めて命令すると、伝令は弾かれたように駆け出した。

「貴様！なぜ部下を行かせた！
我々の下にいるという認識ができていないな！」

止める間もなく伝令が駆け出したことで神聖騎士たちが色めき立つ。
いつ俺がお前らの下になったんだよ。
まったく、早く社会的に抹殺してやりたいところだ。

「そう騒がなくとも従いますよ。
この陣地を守って敵を食い止めればいいんですよね？」

呆れたような表情を浮かべつつも、従うような趣旨の内容を述べる。

表面上だけでもそう言っておけば、どうせまずくなれば逃げ出すであろう彼らは何もいえないはずだ。

「そう、そうだ！
貴様、人の使い方は慣れているようだな？」

ほう、見るからに腐った貴族的な言動をしているくせに、俺の部隊の状況はある程度把握できる能力はあるのか。
これはこれは、評価を改めなければならないな。

「よし、雑事は貴様に任せるから後は何とかしろ！」

何なんだこの人達は。
そりゃまあ、自由にやらせてくれるのはありがたいが、そんな事でいいのか？
まあ、取り敢えず撤退の自由はまだ無いので、ここで何とか踏みとどまる方法を考えよう。

「それでは後はお任せ下さい。
曹長！」

声をかけると彼は直ぐに飛んでくる。
もちろん言うまでもなく分隊長たちも引き連れてだ。
ああ、彼のような人物が下についてくれて本当に良かった。

「偵察はすぐに出せます。
どのようになさいますか？」

見れば多重結界石を載せた馬車がこちらへ向かいつつある。
先程までは部隊の真ん中を進んでいただけなのに道を外れてこち

らに向かいつつあるという事は、彼が手を回したのだろう。
まったく、彼はどこまで仕事が出来るのだ。

「丁度いいことにここは低いながらも丘だ。
反対側の斜面に本部を置く。
道に面した斜面に陣地を作らせろ」

しゃがみ込んで地面に地図を描く。
汚いものだが、こういう場合はおおまかな地形的特徴だけ伝われば
いい。
少なくとも米軍と英国軍の教本にはそう書いてあったから信じよう。

「我々は街道を進む敵の迎撃を目的とする。
この丘に陣地を置き、横から殴りつけるような形で攻撃を行うわけだ。
ドラゴンなどによる空からの襲撃の可能性があるため、地面に深い溝を掘り、そこに兵士を並べてファイヤーロッドで攻撃させる。
攻撃に晒された場合には即座に溝の底にしゃがみ込むように言っておけ。
本部と物資の保管所などは全て反対側の斜面に置き、敵の攻撃を避けると同時にいざという時の撤退を容易にする。
何か質問は？」

塹壕掘って持久戦か、自分で命じておいてなんだが夢のかけらもない姿だな。
ファンタジー世界というより、第一次世界大戦という感じだ。

「見たこともない陣形ですが、確かに方陣を組んで敵を受け止めるには色々と不足していますからね。

私は特にありません、直ぐに命じますが、補給の方はどうなるのでしょうか？」

既に隣までやってきている馬車を見て曹長は尋ねる。

撤退中に工兵隊も回収できたために装備・人員ともに豊富ではある。

しかし、糧食その他消耗品は絶望的な数量しか無い。

このままでは直ぐにみんな揃って玉砕か敵前逃亡を選択しなければならなくなるだろう。

「ここにいた連中もあわせて、ざっと１５０人ほどだな。

まあ、一ヶ月は何とかできる。

半月を越えても補給すらないようだったら次の手を考えようじゃないか」

俺の言葉を信じてくれたらしく、曹長は笑みを浮かべると了解しましたと答えた。

「よし、直ちに陣地設営に移れ」

こういう場合、初動が大切だ。

多重結界石を始め、ありったけの魔道具を駆使して速やかに陣地を構築しなければならない。

唯一の救いは工兵隊を拾えたことだが、逆に言えば俺の私兵とはいえ、経験を積み、そして戦争以外でも役立つ彼らが置いていかれたという現状が恐ろしい。

多国籍軍である以上、他の国からも同じようにして動員された技能職がいるはずだ。

彼らも同様の扱いを受けてしまっているのだろうか？

騎士や弓兵といった軍事の専門職も重要だが、既に長期戦の様相

を呈している今、後方支援能力を少しであっても削ることは、将来的によろしくない。
総力戦とは国家のすべての能力を結集して戦争遂行に当たることであり、例え一分野であっても能力を失えば、それはいつか必ず全体の弱点として現れる。

「ああ、それと」

俺は立ち去ろうとしていた曹長に声をかけた。

「補給部隊に言ってな、まずは全員分の飯を作らせろ。
食料は例の馬車に入れておくが、不足したら俺に言え」

まずは飯だ。
軍人さんの心を掴むには、それは必須だろう。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7531t/

鍛冶屋とかはじめてみました

2012年1月1日01時08分発行